

最強の目を持つハンター

kurutoSP

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

最強の目を念により強引に手に入れた少女の愛（狂気）の物語。  
HUNTER×HUNTERのアニメか漫画を軽くでも見てない  
人には少し不親切な作品かもしません。

未完となりました。気が向いたら、それでも更新しようと思いま  
す。

目 次

彼女は怒っていた	1
彼女は愛を知り、敗北を知る	4
彼女の天才的頭脳は愛と怒りの数式を見つける。	9
彼女は奇跡を起こし、そして人を辞める	19
彼女は空を舞い支配者となる	25
彼女は被害者だと言う。しかし、加害者ではないとは言わない	31
彼女は正義を執行する	38
彼女の目からは逃れられない	44
彼女は微笑み人を殺す	57
彼女は天空闘技場で神になる	66
彼女の朝食、チョーショツク	72
彼女は最悪の人間と手を組んでいた！	77
彼女は間違いなく蜘蛛の一員だとヒソカは思う	83
彼女がヤリニクル	91
ゴンはやはり主人公である	102
彼女は吠える	106
彼女は漢字に弱いのかもしけない	111
彼女は駄々をこねる	116
彼女は飽き性	95

## 彼女は怒っていた

ハンター1次試験会場、彼女は怒りを感じていた。

「ジメジメして、むさ苦しい！しかも汚れた」

…………そなことで、と思うかもしれないが、それは仕方ないことなのだ。彼女は他人よりも些細なことにその怒りの感情を向けてしまうのだ。しかもここに来る間にも怒りを溜めていたのだから。そしてそんなどうしようもないことに怒りを向けていた彼女はつい、変態ピエロことヒソカに両腕を飛ばされ騒いでいた汚れの原因に向けついサーべルを抜き、それがごく当たり前のようには振り、静かにさせてしまった。

ゴン、レオリオ、クラピカは試験会場で優しくこのハンター試験について説明をしてくれるトンパの会話を聞いていたが、突然人の腕が宙に飛び、その後流れるように今度は頭が飛んだ光景を見た。

「ねえ、トンパさん、あの人たちは？」

「44番奇術師ヒソカだな、あいつは去年合格確実と言われながら、気にくわない試験官を半殺しにして失格した奴だ、他にも20人ちかくの受験生を再起不能にしてるやばいやつだ。」

「そんな奴が今年もハンター試験を受けてるのかよ！ただやばさだけならさつきの姉ちゃんも平然と頭はねてたな。物騒すぎだぜハンター試験」

レオリオの問いにトンパは戸惑いながら答えた。

「いやあの402番は話しかけた時はそこまでやばそうには見えなかつたがなあ、俺もあの姉ちゃんは新人だからよく分からん」

「頭を簡単に跳ねる人間がまともな奴な訳ねえだろうが」

「だが腕は確かに様だな、どちらも試験内容によればぶつかり合うだろう」

そのクラピカの発言を受け、レオリオはとても嫌そうな顔して、「マジかよ。そなことないよう願いたいぜ」

彼女の前で物言わぬ死体となつた男を見て彼女は、

「ちつ、しまつた余計汚れた、クソ」

その男にとつては理不尽であろうことに、彼女はそのことに怒りの感情をさらに抱き、その死体をそもそも彼女を汚す間接的な原因に向けて後先考えずに蹴飛ばしていた。……とんでもない女である。

「おつと危ないなあ ♠？こんなことをするなんて、教育が必要かな ♥？」

ヒソカは自身に物が飛んできた方を見た。青い軍服を着て背中に4本のサーベルと腰に鞘をかけ、右手にサーベルを持ち、振り上げた足を下ろしている華奢な少女がいた。その少女はヒソカから見てもかなりの纏をしており、より興味をもつた彼はその少女の顔をよく見た。艶やかな黒髪は肩のあたりで適当に切られ、左目は眼帯に覆われており、切れ長の黒い右眼が彼を強く睨んでおり、全体的に整つた顔だが、今は怒りで歪んでおり、そこから狂気も垣間見えた。そしてその怒りに歪めた小さな口から、

「変態に教育をされる必要なんてないね、変態がうつる、というかこつちきたらあんたを細切れにするよ。悪いのあんたなんだから責められるいわれはないね」

無茶苦茶な理論が飛びだした。

「それはそれは、何か其方に迷惑なことでもしたのかな ♠？」

そうすると彼女は自分が蹴りとばした物を指して、

「そいつが騒いだせいで水が跳ねて私の服を汚しやがった。後うるさい。その原因の大元であるあんたの責任。理解した？ なら反省し、以後私に近づくな変態」

「それは流石に暴論じやないかな、でもまあ、責任とつてあげようか♥、君とも美味しそうだしさ……つて、すごいな全くどこにいるか分からなくなるなんて ♦ ああ…、美味しいぞだなあ ♥」

ヒソカが目をその指が指している方向を向いている間に絶により

気配をたち人混みに紛れてしまい、見つけることが困難になつていた。

「名前聞き損ねちゃつた♣？でも問題ないよね、機会はまだ、まだあるんだし、最高に楽しmaniaきや ♠」

『やばいやばいやばいやばい、怒りに任せて変態に喧嘩売つてしまつた。絶対に目を付けられた。どうしよう、いやどうする。……やるか……いや、奴は変態だが実力は原作の中でもトップクラス、畜生厄介だ』

ヒソカにその場で喧嘩を盛大に売つてしまつた彼女はかなりテンパつていた。

『そもそも、奴が騒いで私を怒らせなかつたらよかつたんだ。…………そうよ、たかが両腕無くなつたくらいで大の大人がみつともなく騒ぐのがいけないんだ。私は常識的に対処しただけ、何も悪くない。…………だが、変態はどうしようか、奴に常識は通用しないし』  
…………素晴らしい常識を持つ彼女は自身では完璧だと自負している頭脳をもつてして新たな答えを導きだそうとしていた。

『そうか！私は私だつた。なら問題ないじやない。私が私であり続ける限り、どう何を恐れてわざわざ対策をとる必要があるのか、最強の目をもつてやつの最強を碎くのみ』

彼女の顔はその時素晴らしい笑顔であり、はたから見ると、怒り青ざめ怒り咳き何かを悟り笑みを浮かべる…………完璧にやばい人であり、彼女の理想像とはかけ離れていたが、そこに鏡はなく、完璧な絶をしていたため幸か不幸か誰も気づかず、自身もそのショッキングな事実に目を向けるということはおこらなかつた。

これはハンター×ハンターの世界に最強の目を持つ男に憧れ尊敬しその人生を黒歴史で埋めたであろう記憶を持った男の記憶を受け継ぐ彼女がその愛をもつて世界に狂氣を振りまくお話である。<sup>愛</sup>

## 彼女は愛を知り、敗北を知る

彼女は愛していた。ひたすらキング・ブラッドレイをただひたすら愛していた。

彼女は生まれた直後己が体を乗つ取ろうとする魂の存在に気づきそれに抗い勝利した。この時、普通なら自我のはつきりとしてない少女の、いや幼女の存在では他の魂との争いに勝てる程のものではないため大抵は、と言うよりも0歳児なら確実に転生者の魂の存在の方が強いため、乗つ取れるはずだが、勝者は彼女であつた。

……このことは彼女の魂の存在が幼女ながら大きかつたことをただ単純に褒めるべきなのか、それとも幼女に負ける彼の魂の脆弱性もしくは小ささにあきれるのが良いのか定かでない。ここで重要なのは彼女が勝利したのだが、同時に彼の魂を己が身にその存在の記憶とともに乗つ取ろうとしたことだ。もちろん、幼女でありながらそんなことをすれば普通は脳に多大な影響が出てまともな人間にはならないだろう。（すでに少女といえるまで成長した彼女の性格の異常性のことここでは言っているわけではないと注釈をつけておく。）しかし彼女はその取り込みにほぼ完全に成功したといつても過言ではない。

普通なら下手すると死んでしまうのだが、彼女はその人間が最も輝いていた物を取り込もうとしたのだ。ここで注意したいのがこの男はそれこそ前世では一流の魔法使いになるくらいに鋼の鍊金術師の世界にはまつており、その中でもキング・ブラッドレイには感動を覚え、学校では意味もなく眼帯をしたり、彼に憧れ剣道部に入つたはいものの二刀流や五刀流（笑）を目指し明らかに痛い人そのものと言つたしそもそも灰色な青春を送り、休日はひたすらかの軍服を着用し、家の扉の前では必ず「自分の城に入るのに裏口から入らねばならない理由があるのかね（ドヤ）」と言い、中学高校の卒業式では「用意されたレールの上の一生ではあつたがお前たち人間のおかげでまあ、多少やり応えのある良い人生があつたよ…（ドヤ）」と言い、成績トップ顔もイケメンと言えるのにその奇行によりその中学校の新

入生代表のあいさつ以来一度も重要な行事には立つことはなかつた。ハイスペックの無駄遣いとはここに極まれりだろう。

しかし、そんな彼だからこそ彼の一生はその物まねに費やされ、魂が薄っぺらくなつたのだろう。（余談ではあるが、大学ではさすがに浮いていることに気づき言動と格好ともに気を付けるようになつたが相変わらず自身の部屋の前では「自分の城に入るのに裏口から入らねばならない理由があるのかね（ドヤ）」をやり続け、社会人になり部下を持つと「敵に情けをかけるな、だからお前は出世できんのだ」と言い、上司・部下ともにとてもウザがられた。）

だから彼女はその彼の輝けるものを手に入れようとした、しかしながら彼女がそれを受け入れるにはまだ幼く、そして純粹で無垢すぎたのだろう。だから彼女はその薄っぺらくもその何十年にも及ぶ彼の一部とはいえ受け取ることができず、ただその中の純粹な気持ちを介して圧縮してうけいれたのだ。

つまり、それはかの存在への愛という形でうけいれてしまつたのだ。そこからははやかつた、彼女はこの世界でかの存在と同じ存在となり、その生きざまを世界に残そうとしたのである。

最初に彼女がしたのは怒りを覚え『ラース（憤怒）』を身に付けることにしてある。……とってもクレイジーな幼女である。そして彼女はただひたすら身の回りの現象に怒りを向けた。

しかしここで終わつていれば性格のおかしい子なだけだが、彼女は幸か不幸かこの世界がHUNTER×HUNTERの世界だと新聞に載るネテロ会長やハンター協会の文字をみて知つてしまつたのだ。

ここで一つ、彼女は生まれながらにして特質系と強化系の能力者であり、後者が彼女のそもそもの性質であるが問題は後者にあり、彼女は魂を二つ持ち偶然にもキング・ブラッドレイと同じように（その質の違いは置いとくとして）魂の戦いを経験している。そしていくら一つの思いの元、圧縮されたとはいえ膨大な量の記憶であり、普通是不可能なことだが、彼女は先天的な念の発現により解決したのだ。それは名前を付けるとすると『魂の書架』<sup>ソウルライブラリー</sup>とでも呼ぶものであり、彼の愛の產物もとい黒歴史とも言えるものだろう、しかしこれにより彼女は

かれの記憶を一部とはいえ継承でき、さらに副産物として完全記憶能力と言えるものをかくとくした。

ここで言いたいのはつまりは彼女にその夢を叶える機会ができるしまったことだろう。つまり、念の習得が漫画知識とは言え獲得してしまったのである。

痛車からブレーキのないアクセルしかない車へと彼女はグレードアップしてしまったのだ。なんとはた迷惑なことであろう。

ここから彼女がしたのは愛に裏打ちされた、そして自身に対する不甲斐無さへの怒りによる修行へと身を投じるのである。この時齢5歳のいまだ幼女な彼女である。

「私の愛は世界を変える、私の怒りはだれにも止められぬ、神はいない、だから人間である私の愛を受け入れぬ彼らには私が裁きを下す、その権利が私にある。そのためにも私は剣を振り、全てをこの目におさえる。この私の愛のために」

彼女は剣を振り、念の修行をした。彼女は一つのことを絶対に忘れない、ゆえに彼女は次の日には昨日の彼女を置き去りにするペースで成長し、狂氣的考え方のもとその自身の信じる思いを確固たるものにして強化系能力として最強の目を獲得したのである。その時、齢10歳の少女な彼女であった。

ここから彼女は天空闘技場に赴き更なる改良を加え、心技体を揃えた最凶の愛もしくわ理不尽な怒りの体現者としての自身を確立させたのである。

そして、今の彼女に至るわけである。

原作通りに1次試験の試験官サトツが現れ、地下空間のマラソンが開始されたその時、

「どうせこの一次、二次、三次試験は数減らしだし、ここで数を減らし

たら試験官も楽だし、私も怒りを感じる要因を排除できるし、彼らは私の愛を感じとれるのだし、これは一石三鳥の名案じやないかしら。」

そもそもこの試験は数減らし以外にも、様々な適正を確かめる意味を持つ試験である。これは彼女の念である『魂の書架』で分かることであるのだが、…………彼女がバカなのは前世の彼の影響ではない、信じたくはないが彼は言動こそあれであつたがそれでも社会で生き抜いていけるだけの頭脳はもつっていた。つまり、彼女は純粹無垢であるのだ。……10代の後半になつてもまだ。彼女は天才的頭脳を持つついても純粹な強化系の筋筋なのだ。

キルアとゴンが友達となつた後、前を走つていた女性が見えた。その時、ゴンはトンパとの会話を思い出しどんな人間なのか確かめくなつていた。

「ねえ、お姉さん、どうしてこの試験を受けに来たの？」

「え！（何でこの子は私のことを認識できるのだろうか、まさか主人公だから私の絶に野生の感で気づけたというの、なんてチートスペック、念も習得していないのにここまでできるとは、理不尽な、ふざけんなよ、畜生が）」

…………もしこの時彼女の絶が完璧ならいかにゴンといえようとも気づけなかつたはずだが、彼女の怪しい考え方とともに邪念を盛大に振りまいていたのである。……バカである。つまりは、不完全な絶の状態であったのだ。

しかし、そんな怪しい奴に声をかけるゴンはまさしく主人公であろう。彼のおかげで結果としてはたくさんさんの命を救う結果になつたのだから。

「おい、ゴン何話してんだ、さつさと前行こうぜ。（何やつてんだあのバカ、どうみてもヒソカと同類じやねか、というかさつきから冷や汗が止まんねし。）競争の途中だろ、先行くぞ」

キルアに先をせかされたゴンは、慌ててキルアの後を追いかけてい

く前に、

「後できかせてね、じゃあ先行くね、またね」

走りゆく彼の後ろ姿をみた彼女は先ほどまで考えていた名案のこと忘れただひたすら、主人公のスペックとコミュニケーション力に嫉妬していた。…当たり前のことであるが彼女に友、もしくは仲間はないのである。そして、

「私は最強の目をもつ女、友達なんて必要ない」

勇ましく言う彼女の右目からは暗闇の中では見えにくいが確かに光るものが流れその頬に存在した。それは前世の影響か、それとも主人公の眩さに自身が怒りを感じる暇もないほどに敗北と、言いようのない惨めさを口に出したせいで漏れ出したかのか、それは本人しか分からぬが、ただ一つ、惨めになるくらいなら言わなければいいのに、やはり彼女はバカである。

彼女の天才的頭脳は愛と怒りの数式を見つける。

『まさか、最強を自負する私が怒りに昇華できないほどのダメージを受けるとは、流石はハンター試験というわけか。だが私は最強の目を持つ女、ともつ……、畜生があああああ!!ファック!』

彼女は無事辛い過去を傷つきながら怒りに昇華させることができたようだが、口からその怒りが溢れ出すのと同時に気のせいか、彼女の目に何か光るものがある……。

「お姉さん大丈夫かなあ」

「ゴン、放つておけよ、それよりこの階段の向こうに光が微かに見えるしあそこがゴールじゃねー。おいてつちまうぞ」

「でも、何か辛そうに見えるんだけど」

「行くぞ。俺たちが落ちたら意味ねーんだし、見た所疲れているつてわけでもなさそうだしな」

「あ、うん。そうだね」

ゴンが釣り竿にレオリオのカバンを持ち、後ろから「ハンターに絶対になつたるんじやー」という叫び声が聞こえてくるのを彼女は確認し原作通りに進んでいるのを確認して二次試験のメンチ対策をどうしようかと考えているのと同時に彼女はひたすらひたすら怒り狂うという、器用なことをしていた。

『クソ、……でも原作通りなら寿司をどうにかしないと、……畜生、……  
ネタはどうする、……ガツデム、……そもそもあれは確か忍者もどきとヒソカが原因だつたか、……カスが、……奴らを処分するか、……虫ケラが、……いや、そのまま豚の丸焼き試験だけだつならどうする、……あああああ何なんですかああああ、次から次へと、最強の目を持つ私が何で解決できない様なことが試験内容なんだよ！死ね氏ねしねシネd e a t h。何を切れば試験に合格できる、それとも何を殺れば合格できる、それともばらせば、……落ち着けそもそも私は奴らとは違う、最強の……！そとか、私は最強の目を持つ女、私が私

である限り何も問題ない、つまり解決策は私の愛を彼女に渡せばいいのだ、そうじゃない、料理は愛情、何も問題はないはね、ウフフフフフ、やはり私が最強、私は最強…………』

彼女が狂気に身を委ねている間に地下からでて、ヌメーレ湿原に到着していた。

「ようやくゴールかよ」

レオリオが疲れ、腰を下ろしていると、

「あつ、レオリオ」

ゴンが彼を見つけて、原作メンバーが集合した時、試験管により、今度はこの詐欺師の壇と言われるヌメーレ湿原をただ試験官の後をついていくという前半と場所が変わつただけの試験に嫌気を出す一同だが、ここで人を食べるための生態系ができており、騙されるなど、忠告されたすぐ後に原作通りに、人面猿が出て着て試験官の振りをして受験生を騙そうとする。本来ならここでヒソカが殺し、ここでの厳しさを受験生が身をもつて体験するところだが、

「騙されるな、そいつはあ、……」

「あああああ、出たらまたジメジメしてるし今度は泥かよ、フザケンナ、手前も私の前に立つな、そのせいで臭い獣臭をなんで嗅がなきやならんのよ死ね。」

彼女の沸点は相変わらず低く、同時に人面猿は運の無いことに彼女の前に立つてしまつたがために、原作より出番がないまま、退場となつた。同時にトランプを取り出し自分が暇つぶしに利用しようと考えていたヒソカはとてつもなく悦んでいた、どこがとは言わないうが。

『まさか、気づいたらもうサーベルを振り抜き終わつてるなんて？　ああ、彼女と戦いたい、彼女とならとつても気持ち良くなれるはずだよ◆？？　我慢しなきや、流石に今はまだ試験中だし、摘み食いじや終わらなくなつちやう◆？？　やりあう時が楽しみだよ◆？』

ヒソカは滾つていた。そして他の者たちの反応は、

「すごいや、全くいつ切つたか分からないや」

「おいおい何か言いかけていたが、殺して大丈夫なのかよ」

「……」

「マジかよ、親父たち並みの奴何てそう存在しないと思つてたんだけど、バケモンかよ」

それぞれゴン、レオリオ、クラピカ、キルアである。

「これはすごいですね。」では、二次試験会場にご案内いたします」

サトツは驚きながらも、平静を保ち、一次試験同様歩きだした。

後半戦はほぼ原作通りだつたが、異なることとしては、彼女の所為で興奮した変態が、熱いパトスをよりほどばらせていたくらいだろう、もちろんそれにより他人の精神がゴリゴリと削れようと自身に影響しなければ、彼女はどうでもいい問題としてほつといた。

彼女にはそれよりもどうにかしなければならない問題があつただ。

それは前を走る男たちの暑苦し声や熱気、そして跳ねる泥、さらに彼女をイラつかせるのは、彼女の前を走るエセ忍者ことハンジーである。彼が頭を揺らす度に、反射した光が彼女の視界に入つてうざつたいことこの上ないのである。そして、レオリオに何かあつたのかゴンが叫び声を聞き飛び出した時、同じくして彼女はキレた。

「なぜあの変態が自由に暴れられて、自分が我慢せにやならんのか。……ざつけんな。全てぶつ飛ばしてやる。まずはそのハゲをぶつ飛ばす」

「誰だハゲつて言つたやつは！これはハゲじやない、剃つてい、びぶるち！」

「どつちでもいいのよそんなん、その頭がムカつくのだからぶつ飛ばすのよ」

彼女には、それでもほんの少しの理性が残つていたおかげか、頭が飛ぶことはなかつたが、彼は頭に大きなもみじの後がついていた。それを見て満足したのか、清々しい笑顔で、

「こうすればよかつたのよ、やつぱり。さあてと、後は、前の数人に繰り返せばミツションコンプリートね」

彼らはここで道をそれるのは危険だと分かっていたが、確実にくる災難を前に不確実な危険に飛び込んだ。彼らは実力がある所為で彼女の前を走つていただけに、彼らに非はないが、ただ一言いうならとても不幸であつたといえよう。というよりも、後門のヒソカ、前門の彼女、はつきり言つて詰みでありどうしようもない。彼らではなく、受験生全員が不幸であつたとしか言いようのない試験となつた。

しかしそれでも最終的には102人程度の合格者が出たのは、流石というべきだろう。そんな中、ゴンと途中で別れたキルアは頭のイカれた女の所為でひどい目にあいながらも無事であり、レオリオとクラピカを助けに行つたゴンが戻つてきたことに驚くと同時に喜んだ。

「よく無事だつたな、ゴン。てつきり今生の別れになるかと思つたぜ」「こんじょう？、！根性ならハンターになるつて決めた時からもつてるよ」

「バカ、ちげーよ、てつきり不合格になつてるかと思つてたんだよ。しかし、よくあんな霧の中から帰つて來たな」

「俺、鼻はいいから

「犬かよ」

二人の再会による話を邪魔しないように静かにしていたクラピカだつたが、流石にそろそろヒソカに連れていかれたレオリオのことを確かめないといけないと考え、

「二人とも、再会できて嬉しいのはわかるが、ゴン、レオリオの無事を確認しないか」

「あつ、そうだつた」

「あれ、そういうえば年齢詐称のやついねえじyan。やつぱ何かあつたのか」

「うん、ヒソカと鬭つて、その時にレオリオがヒソカに運ばれて行つたんだけど」

「マジかよ、よく生き残つてたよな」

「うん、殺されると思つたけど、何か合格つて言われて何もせず去つて

いつたんだ

「何だそりや？」

「奴は私達と鬭う前に試験官の代わりをすると言っていたから、おそらくだが、私達は奴の何らかの基準をクリアしたから合格者とされ、殺さなかつたのだろう」

「ふーん、大変だつたんだな、そつちも」

「そつちもつて、キルアの方も何かあつたの？」

「そうゴンがキルアに問いかけると、嫌なことを思い出したというような顔をして、

「そつちが変態なら、こつちは狂人に追い回され張り倒されるところだつたぜ」

「何が起きたらそうなるのだ！」

クラピカはキルアの話を聞きあまりにもあまりな内容だつたためつい二人の会話に再度割り込んでしまつた。

「いやさ、あの猿を問答無用で切つて捨てた青い軍服らしき服を着込んだ女が、いきなりハゲの忍者はつ倒したかと思うと、近くにいる奴を手当たり次第にぶつ飛ばし始めてさあ、しかもその時のセリフがよお、『あはは、いける、私はやれる、このクソどもを潰して、私の愛を知らしめながら、……素晴らしい、……だからね、君達に私はお願ひしたいの、……大人しくこうべを垂れて私の怒りを受け止めて、死ねやああああ!!?』って笑つたり、真顔になつたりしながら、こつちに來たんだぜ。ほんつと、冗談抜きに怖かつたぜ」

「いや、何だそのめちゃくちゃな理論は、そもそも会話というか言語能⼒は正常なのか彼女は、何というか、見た目からは想像出来ないな」「だから、トンパさんも戸惑つてたんじゃない」

「なるほど、そういうことなのかな？とつ！それも大変なことであるのは分かるが先にレオリオを見つけようか」

あまりにもショッキングな内容だつたため危うくレオリオのことを見れそうになつたクラピカだが、しつかり者の彼は話を元に戻した。

「大丈夫だよ、さつき、ヒソカを見つけたんだけど、ヒソカが指差した

方の木陰で休んでたよ」

「そうか、なら合流しよう。それと見つけたなら早目に伝えといてくれないか」

「ごめん」

「ねえ、僕がいない間に随分と楽しんでいたらしいじゃない♦？」

だいぶ愛を授けることができてスッキリとした気分で二次試験を待っていた彼女の気分は一気に急降下し、一閃、

「危ないなあ♣？…でも君から誘ってくれるなんて♦、激しくしてあげるよ♠？」

「なわけないでしょ、この変態。近づいたら細切れにするつて言つただろ」

「うーん、今細切れにされるのは少し困るかなあ♦？、じゃあ、試験後に一緒に遊ばない♥」

「寝言は寝て言え、死んでも嫌だね。」

不快になつた彼女は、相手にするのも面倒くさくなり、戦略的撤退をした。

「残念♦？、また、振られちゃつた♠？」

第二次試験が始まり、最初のお題は豚の丸焼きとなつた。原作通りだつたと内心では喜ぶ彼女は、豚のついでに二つ目のお題である寿司ネタを探すこととした。

『とにかくあのクソ忍者もどきが料理をバラす前に、そしてヒソカがない間にメンチに出すことさえできれば、合格する確率は高いはず、主人公達には悪いけど、ヒソカとともに落ちてる。どんな闘いであれ勝利を掴むのは私一人で十分だ。くくく、私に嫉妬を、この私が原作の主人公とは言え、現時点ではただの人間の子供に何か劣等感を感じずにはいられないなんて許せないんだよ。ああそうさ、ただの人間にこの私が嫉妬を感じるなんてあるわけがないんだよ、この私が、

…………やつぱりついでにヤロウカナ』

彼女は本当に最強の目に憧れ、怒りをその身に宿しているのだろうか、これでは嫉妬のエン……とにかく、彼女がブチキヤラ崩壊を起こしている間に、

『二次試験始まり』

「「豚を探せ～～～」』

「ブ

ツ

ブ

ツ

「ちょっとあんた!!? 早く行かないと不合格になるわよ』

「はつ！しまつた、出遅れた』

メンチに注意され、現実に戻った彼女は慌てて豚を狩りに行く。その時考えていた危ない思考を一時しまつた。これで、原作主人公が助かつたのだから、メンチは主人公の恩人ということになるのである。

狩つて来た豚をブハラが全部骨を残して完食したのにクラピカが

ショックを受けている間に、メンチが自身がだすお題として握り寿司

を宣言した。

『よし、これなら合格貰つた』

彼女がそう思いレオリオに期待していると、期待通り、

「魚！」

全員がそれに反応し、川に魚を取りに走つて行つた。

「あんたは行かなくていいの』

メンチは全員が出てからしばらくしても全く動かない彼女を見て、少し心配して問い合わせたが、その問い合わせせず、いつの間にかもつていた魚を空中に投げた。

「ちよ、何してんのあんた！」

いきなりの食べ物への蛮行を見て叫んだメンチだったが、次の瞬間、光の線が魚にはしり、皿の上にいつの間にか準備されていたひどにぎりのシャリの上にその身が乗つた。

「どうぞ、召し上がるれ』

「食えるわけねえだろアホが」

彼女が、自信をもつて出した寿司は一瞬のうちに投げ捨てられた。あまりのメンチの早業に、さすがの彼女も反応出来ずに呆然とした。「何が阿呆か、クソあま、寿司の形は完璧だし、ネタは完璧に切ったから断面も完璧、流石にシャリはそこまでではないなしても、見た目も、ネタの食感も悪くないと思うんだけど、それを捨てるとは、何様のつもりだ、ゴミが」

試験を合格したいなら普通は試験官の印象をよくしようとするものだが、すっかりそんなことを怒りで遙か彼方へと追いやる。もちろんそんなことをすれば、

「ナチュラルに試験官を罵倒したんじやないわよ、そんなに落ちたいわけ、というか、そもそもこのネタ、見た目をよくするためにわざと皮を残したのだろうけど、鱗くらい取りなさいバカ、さらにあんたのその刀、確かに色んなもん切つて来たやつだろう、普通にばつちいわよ。さらに言えば、骨が残ってる。切る場所間違えたわね。これでも文句ある」

「だけど、」

さらに文句を言い、最終手段の愛によつて説得しようとしたところで、横から頭に特徴的なモミジをつけた忍者であるハンゾーがやつて来て、

「あんたの番は終了だ、次は俺のを頼む」

「形はさつきのと同等だけど、鱗や骨が残ってるなんてミスはなさそうね、はむ、もぎやもぎゅ……失格、もう一度あんたたちはやり直し」「なつ、んなばかな！」

この時ハンゾーは自分以外に握り寿司を知っている人間なんかいないと思つていただけに、自分より先に寿司をもつて行かれたのもあり、とても焦つていた。つまり、やらかしてしまつたのだ。

「飯を一口サイズの長方形に握つてワサビをのせ、その上に魚の切り身を乗せるだけの簡単な料理たろうが、こんなのは誰が作つても関係無いだろうが、そこのバカみたいに料理の初歩すらできんやつとは違うんだぞ！…………へぶち」

「貴様だけにはバカと言われたくない。次言つたら殴るからな」

「ちよつとあんた、そいつがバカなのはわかるけど、もう殴つた後に言つてもしようもないし、地面に顔が埋まつてたら聞こえないわよ」

この後は、原作通り進み、合格者0人となつたが、あまりにあまりな結果なため、ハンター協会会長のネテロがとりなし、クモワシの卵を取る試験にかわり、原作と同程度の人数の合格者を出した。

飛行船にすべての受験生が乗り、次の試験会場へ向かうことになり、ゴンとキルアは飛行船の探索をし、そこからネテロ会長の暇つぶしに付き合い、レオリオとクラピカはトンパの戯言を気にせずに睡眠をして、各自の時間を過ごしていたころ、彼女は一人廊下を人気のない方へゆらりゆらりと幽鬼のように歩いていた。

「……クソ、……クソ、：クソ、クソクソクソ、どうしてうまくいかないんだ。やつぱり、トンパか、ヒソカがゴンかメンチかそれともほかの不愉快な男どものせいかな、この世界は私の愛を理解できない嫌な奴ばかりだ。そうだよ、いやな奴、嫌な奴、嫌な奴、1やな8つ、い8な82、187やつ、18782ばかり？18782ばかり！そくか皆殺しにすればいいんだ、そうだよなんて頭がいいんだろう。単純な足し算を持つて、いやな奴を皆殺しすればいいことを証明できるなんて、そうさ、私が私である限り、私は決めたんだつた、神などいないのだから私が裁くのだと、だから迷うことはない、自身の信念と数学という絶対法則に従いヤレバいいのだ、なら誰からやろうかしら、やはり会長たち？嫌だめだ、それだと外に漏れる可能性ができるから、まずは通信機器からやらないと、まだ世界に私の愛を振りまくには準備が足りないのである。それさえ終われば、人種、民族、組織、種族の何物にも縛られずに愛をぶつけあえる。楽しみだなあ、この世界に対する怒りを、自身に対する怒りを、他者に対する怒りを、人があらゆるものに向ける怒りをただぶつけ合えるなんて、なんと素晴らしい

いことか」

この時の彼女は、確実に狂っていたであろう、しかし同時に怒り狂いながらもその信念にあるのはただの愛である。彼女は怒り狂う対象に愛を向け、愛を向けた対象に怒り狂い、その怒りと愛はどまることを知らずにお互いを高めあっていく。このとき彼女の眼帯が外れていたのならば誰もが不思議に思うだろう、なぜ1匹の蛇が自身の尾を食べ輪になつてているのではなく、二匹の蛇がお互いの尾を食べるウロボロスのマークが目に刻まれているのかと。

そして、彼女のその二つの思いが高まつたとき、

【『魂の書架』の「感情の書」と「知識の書」を開きます】

彼女の念能力が発動した。

## 彼女は奇跡を起こし、そして人を辞める

彼女の念能力『魂の書架』はその人物の経験の全てを定期的に彼の魂に移し刻みむものである。もちろん、その経験は彼女が任意に引き出せ自身に還元することが可能であり、刻み込まれた経験は決して付け焼刃のものではなく、十全に扱えるようになる。

そして、自身の経験を彼の魂に移すことにより、整理され様々なる本という形で保管される。この本には大きく分けて「知識」と「感情」の二種類あり、知識に分類される本は、最初に整理された本を原書とし、そこから彼女の最強の目に最適なモノだけを記した書「王の書」を作り出し、感情に分類される本は、その感じたものを「怒り」と「愛情」の二種類に整理し保管される。そして、この書を作成するのは1日の終わり24:00。ピッタリか、彼女の幼い脳が怒りと愛の二つの感情を処理しきれなくなつた時に、自衛のために発動する。

ここまでだと、彼女は自身の記憶を『魂の書架』に移動させ、整理することにより完全記憶能力者のようなデメリットを排し、さらにその知識を無駄なく最適に使用できる。これに最強の目があわさつたなら、戦闘に関しては全ての事象を見抜き、学び、最適化をするため、これ程彼女にピッタリな能力はないだろう。

しかし、これは彼女が全ての経験を彼の魂に捧げることにより起される奇跡の様なモノである。

まず前提として、『魂の書架』は書がないと利用出来ないので、書を作成するために彼女の経験の全てを捧げる必要がある。つまり、捧げた時点で彼女には何も残らない。以前彼女のことを純粋・無垢と表現したが、それは文字通りの意味であり、彼女を表現するには、それ以外の言葉がそもそも存在しないのである。

しかしながら、一つの疑問が浮かぶであろう。さらに狂気を追加した方が良いのではないかということであろうが、やはり彼女にはそれ以外の表現はないのである。なぜならば、彼女が感じることができる感情は、『魂の書架』の感情に分類される本が、怒りと愛情しか存在しないのだから、その二つしかないのである。ゆえに、彼女はその二つ

の感情を基本として他人に接するため、狂気と言える行動も言動も他の視点からであり、そもそも他の感情を感じられない彼女にしてみればおかしいのは他の人に見えるのであり、二つしか感情のない人間として彼女を見たとき、恐ろしいことにそれは狂気と表現することが正しくなくなる。

もう少し理解しやすくするためにレミングの集団自殺について考えてほしい。これは簡単に言えば、彼らは数が一定以上になると集団で自殺をするという事象なのだが、何も知らなければ、人間の立場として考え、狂氣的であると感じるかもしれないが、彼らにしてみればこれは種の存続のために、彼らの遺伝子に刻み込まれた、彼らにとつて当たり前のことであり、そこに狂氣など存在しないのである。つまり、彼女は純粹・無垢と表現するしかないのである。

だからこそ、彼女は完璧に書の内容をその身に受けることができるのだ。その対価としてその他の感情を捧げたといつても過言ではない。

だから、彼女は両親から怒りと愛情を学びはしても、なぜ両親が悲しむのか、なぜ楽しいのか、なぜ憐れむのか、なぜ喜ぶのか、なぜ苦しんでいるのか、なぜ……、どれも知識として理解して、どう対応すればいいのかの最適解を持つていようと感情として学ぶことはできなかつた。しかし彼女は幸せだつた。彼女の<sup>人間性</sup>のほとんどと人としての人生、もしくは幸せを奪われたにもかかわらず、彼女はこの世界で最も幸せなのは自身だとすら考えていた。

なぜならば、彼女はこの奇跡的な能力による対価としては安いものだと思っていたし、かの存在への愛だけではなく、その象徴たる怒りの感情すら残つており、それしか残つてないから、二つの感情をより深く理解し、そして彼女を最強にする念能力『愛と怒りを捧げる最強の目』をより完全にするための制約と誓約としてちようどよかつたのだ。

そして、その制約と誓約としては怒りと愛の感情を捧げること、捧げる感情がより強いほど、より純粹なほど最強の目がとらえる事象が増え、よく見えるようになる。これはクラピカが蜘蛛に対する強い怒

りの感情ですら、自身のオーラを殆ど使用しない限り、キング・ブラッドレイの目と同等のモノを得れないのに対し、彼女はその怒りと愛情でキング・ブラッドレイと同様の目を得るだけでなく、周囲の風の流れ、温度、湿度など見ることにより、彼女の目は見える空間の情報を全て把握する、なので一度見て把握している空間なら見なくとも把握することができる程で、その目を持つ彼女は空間を支配するといつても過言ではない。さらに彼女は身体強化にまわすだけのオーラを残しているのである。これだけで、彼女がどれだけ愛し、怒り狂っているのかがわかる。

しかし、彼女は成長しない。矛盾しているのかもしねいが、彼女は自身の全てを捧げるため、彼女はいつまでも変わらないのである。だから彼女の脳は許容量が一般人よりも小さいため、ふたつの感情が無限に高まると耐えられなくなるのである。だからこそ……

### 【『魂の書架』の「感情の書」と「知識の書」を開きます】

一次試験、二次試験と彼女が蓄積してきた怒りと愛情がついに許容量を超えて発動した。

『…………発動しちゃつたか、はあ、いつ体験してもこの自身にあつた唯一の感情が抜かれるのは、何もなくなり空っぽになつた感じがして嫌だね、…………クソが。はあ、またハイな状態になるには時間がかかるなあ』

彼女はこの一瞬が嫌いだつた、と言つても知識としてそう判断しているだけでその根底にあるのはやはり怒りではあるのだが。

『さて、どうしようかなあ、今日はリセットまでに後3時間程度だし、仕方ないけど、一般人と同じ程度に考えられる今のうちにヒソカに接触するかな』

この念が発動すると彼女の怒りと愛が一時的とは言え、消えるため比較的まともになるのだ。そして、トンパが話しかけた時の彼女がこの時の状態だつたのである。この時の彼女は、容姿と相まって、楚々とした美人であるだけに残念である。

「へえ♦まさか君の方から来てくれるなんて、うれしいなあ♥」

ヒソカはトランプタワーを作つては壊してを繰り返したところに彼女が来て自身に話があると言つてきた時、試験時の彼女とあまりに違ひ驚いていた。それは飛行船の廊下を人気がいないう場所に移動している現在でも彼女のオーラが余りにも静かであり、昼間の荒れ狂い力に溢れていたオーラを纏つていた彼女からは想像がつかないほど、対極にあるといつてもよいほど異なっていた。

『昼』とは全く違うけど、これもまた美味しそうだ♦だけどどういうことだろうねえ、なかなか興味深い♣』

「話つて何かな♠、デートなら喜んで受けてあげるよ♥」

ヒソカは彼女が立ち止まつたので、話しかけてみた。

「違うわ、変態とデートなんてするわけないでしょ。頭ちょっと丈夫。そんなことよりも、幻影旅団にわたしを入れろ変態。適当に団員の一人やるから紹介しろ」

彼女の発言により、確かに場の空気が凍つた。いわゆる濃密な殺気がヒソカから発せられたためである。

「どうして、僕にそんなことを聞くのかな♠」

「だつて、あなた団員でしょ。…ごまかさなくてもいいわ、私の目は全てを捉える。背中に堂々とあれば分かるわ」

そう言つて彼女は左目の眼帯を取り、その異常な目をヒソカに曝した。もちろん彼女の目は素晴らしい性能を持つが透視能力を持つているわけではない（疑似的には可能であるもののオーラの圧倒的無駄遣いとなるため、特殊な事情がない限り使用することはない。）、原作知識を利用したハッタリである。しかし、その異様な目と真実の情報により、ヒソカはごまかしが効かないと思ふ。

「へえ、いい目をしているんだね♣でも、僕に何もメリットもないし面倒くさいじやない、それに今ここで僕と戦えばいいじやない♥」

ヒソカからおぞましいオーラが大量に放出された。

「メリットならあるわよ変態、それと気持ち悪いからそれ納めなさい」「どんなメリットだい◆」

「だからオーラを、…やつぱいいわ。話を続けるわよ。まず確認したいのだけれど、あなたは強者と戦いたいのよね？」

彼女はヒソカにもう一度注意をしようとして、変態に何を言つても無駄だということに気づき、交渉を再開した。

「そうだね♠」

「なら、幻影旅団に入ったのもその仕事の過程で強者と戦えるから、もしくは旅団員と戦いかのどちらかでしょ。これに間違はないわね」「そうだけど、それで何ができるのかな♣」

「私の目がいいのは知ってるよね。この目でとらえた獲物は私は一度も逃したことがないんだよね。言いたいこと分かるかな」

それを聞きヒソカは、彼女の利用価値と自身の目的達成にどれだけ影響を及ぼすかを瞬時に計算し、

「でも、それは君が負けたら何も意味がないよね」

「問題ないでしょ。あなたは今まで通り過ごすだけだし、それに私が騒ぎをここで起こせばまずくなるのわあなたのほうよ。もう一度ハンター試験したいなら別にいいけどね」

「うーん、それは困るかな♣、でも、その話は君がハンター試験に合格出来たらでいいかな♠」

ヒソカは、彼女が団員になろうがなるまいが、そこに騒ぎが起ころことを予想し、それを利用できる可能性を発見したため、どちらに転んでも損がないと判断した。

「今はそれで問題ないわ。じゃあおやすみ」

「一緒に寝るかい♥」

「死ね」

ヒソカは去つてゆく彼女の後ろ姿を見ながら本当に残念そうな顔をしながら、

『彼に依頼でも頼んでみるかな♠、それで死ぬなら口封じできるし、死なないなら死なないで、計画に十分利用できるしね◆、ああ、本当に楽しみだなあ♥』

その頃、ヒソカの目から見えなくなつたところで彼女は、『何とか上手くいきました。しかし、ほんつとキモイわね。……思い出しただけで吐き気がするとわ。クソ、サツサと死なないかなあいつ』

近くにあつた植木を彼女は通り過ぎざまに無意識のうちにバラバラにしており、その剣筋は美しいのだが、物騒である。

やはり、彼女はどこまで行つても彼女であることには変わりはないようだ。

## 彼女は空を舞い支配者となる

第三次試験会場である。トリックタワーに受験生が到着し、72時間以内に一番下まで降りることが試験内容だと言われ、皆が戸惑っている中、一人の男が得意げに自身が一流のロッククライマーであることを言い、タワーの天辺から下に向けて、タワーの外壁の僅かなでつぱりを頼りにスイスイ降りて行つた。その様子を見てレオリオが、「こいつはすげーな。マジで命綱なしでやれるもんだ。こりゃあ奴が一番乗りか。こうしちゃいられねえな。お前らも急ぐぞ」

レオリオが真似て降りようとしたとき、ゴンが、

「ちよつと待つて、向こうから何かくるよ」

その言葉に反応したレオリオは遠くの方から何か近づいているのが見え、少ししてそれが鳥と言つて良いのか分からぬが不気味な顔をもつた生物が数羽飛んで来ているのだと分かつた。

「何がありや」

「気持ちわりーな、あれ」

キルアがその気持ち悪さに顔をゆがめている間に、その鳥（？）達は壁に張り付いていた男に向かい、そして、

「うわ、なんだクソ、近寄るな、やつ、やめろおおおおおお」

「「きしやああ」」

「ぎやああああああ」

鳥の鳴き声とともに男はその体をその巨大な口で啄まれ、羽から送られる風を受けて、手を壁から離し落下していく。それを鳥につかまれ何処かに運ばれ見えなくなつた。

「よし、サツサとこのタワーを攻略する方法を見つけるか」

「何言つてんだ、レオリオはもうその方法見つけてるだろ。俺はしないけど」

「何言つてやがる、このクソガキが、あんなの見て同じことできるわけねーだろ、何か別の方法があんただろがよ」

レオリオが一瞬にして、考えを改めたのを見て、キルアがおちよ

くつたが、レオリオの最後の発言を聞き、クラピカが、「確かにこのまま降りるのは不可能だろうな。となるとレオリオの言う通り別の方があるはずだ」

「だろう」

「で、そんなにどや顔しているレオリオは何か見つけたのかよ」

「…………」

「役に立たねえの」

「何だと、このクソガキイ」

「やめないか！二人とも。時間は限られているのだし、下に行く方法を考えよう」

「そうだよ。クラピカの言う通り。今は下に行く方法をみんなで考えようよ」

レオリオとキルアの漫才をクラピカとゴンで止め、方法を考えているその頃、彼女はと、…………寝ていた。

彼女以外の受験生が降りてから半日近く眠りほうけた彼女は、

「うーん、よく寝た。さてとどのくらい時間が経つたかな。どうやら受験生は全員トリックを見破り下に降りたようだね……って、私半日も寝てたの！はあ、まあいいか」

そう言つた彼女は、タワーの端に歩いてゆき、下を覗き見て、怪鳥がかなり下方にいるのを確認し、その左目の眼帯を外しながら、「やつぱり、この私がクソ鳥なんか下等生物のせいでこのトリックタワーをこそそと攻略しないといけないなんて間違つていてるわ。正面に入口があるのでから、わざわざ仕掛けを利用する意味などこの私にはないわ」

彼女は何の躊躇もなく足を前に運んで……、落ちていった。

彼女が落下を決意した時より少しして、タワーのゴールでは、「第二号！301番ギダラクル、所要時間12時間2分」

タワーの壁の長方形に凹んでいる一部が上がり人が通れる空間ができ、そこから301番のプレートを付けたギダラクルとアナウンスで呼ばれた男が姿を現した。ギダラクルの姿は異様であり、一言で言い表すなら、モヒカン鉄男というしかないだろう。そんな彼は周囲を見渡し、すでにヒソカがゴールしているのを見つけ、「君はすでにゴールしていると思ったよ」

「そう、それはありがたいなあ♥、それで君に頼みたいことがあるんだけど♦」

「金を払ってくれるなら、考えてあげる」

「簡単なことさ♣402番を殺つて♠、あつ、でも本気でやらなくてもいいよ、実力が知りたいだけだから♥」

「口座に振り込んでおいてね」

「了解♥」

ギダラクルとヒソカは知り合いなのか、かなり物騒な話をし、それが終わつたころに何故か外から光の入らないはずのトリックタワーのゴールの広間に月明かりが差し込み、

「第三号！402番セリム、所要時間12時間3分」

彼らの話題の中心人物が入ってきた。

「あれだよ♦、おいしそうだと思わない♥」

「ターゲット確認つと、それとヒソカ、理解できない」

「残念♠」

ヒソカとギダラクルが確認しあつていると、今度は凹みの一部が上がり、そこから、

「よつしやあゝ！一番のりだぜ～」

「第四号！294番ハンゾー、所要時間12時間3分」

彼女に忍者モドキと酷評された彼が出てきて、喜びをあらわにした

かと思うと、周りを見てガツカリした様子で、「ノオオオ、なんてこつた、まさか四番だなんて、というか上で寝ていたイカレ女よりも遅いだなんて屈辱がああつ、ゲボ」

「ウツサイ禿、いちいち、癪にさわるなあ、そんなに私を怒らせたいのかそなんでしょ、死ねえええ」

「ちよつまつ、ぎやああああああ」

哀れ忍者なり、とでも言つたところであろうか、だが爆弾並みに扱いについては厳重に行わなければならぬ彼女に挑発まいなことをした時点で自業自得である。そんな彼は腹に一発、その後、低くなつた頭にケリを叩き込まれ、宙を舞つた。その様子は、闇夜に浮かぶ満月のようであり、薄暗い広間ではよく輝いていた。

ゴールする前まで、少し時を遡り、彼女が宙を舞つたとき、最初に降りた男性のように怪鳥に狙われていた。なんと彼女は一切絶を行つていなかつたのだ。それは彼女が自信の目に絶対の自身を持ち、どんな戦場だろうが自身の最強が揺らぐことのないことを信じていたからである。実際に、彼女は凄い勢いで落ちていく中で、夜にもかかわらず、全部で5羽の怪鳥の三次元的動きを完璧に把握していた。なので

「甘い、その程度では、私に攻撃は届かない」

彼女は前から突撃して来る怪鳥に対し体をひねり、怪鳥と同じスピードで右腕を動かしその頭を掴み、その攻撃をいなししながら背中のサーベルを瞬時に一本抜き、怪鳥の巨体が通り過ぎる間に左手にあるその剣を逆手に持ち替え突き刺し、空中での取っ手の代用とした。

「ぐぎゃあ」

「煩い。空中なら勝てると思つた愚か者どもが、なめてんじやねえぞおおおおお」

突き刺したサーベルを利用して怪鳥の胴体に乗ると同時に引き抜き、体にまわしていくオーラを全てその剣に注ぐ硬を即座に行い首を切り落とすと、最初の怪鳥が突つ込むと同時に他の四羽が後ろ、左右とその下から迫つていたので、僅かなタイミングのズレを見切つた彼女の目は『王の書』から最適な行動を選び、先ず最初の怪鳥を切つたときに正面に来るようになつた怪鳥に向け、瞬時に飛び込みその首を搔つ切ると、そこに飛び込んできた左右の怪鳥に対して、左手に

持つたサーベルを振ったそのままの軌道で同様に左の敵を屠り、右の相手には左肩のサーベルを抜刀し、勢いそのままに切りつけ、下から迫る敵についてはその開かれた大きな口の牙に足を乗せるという曲芸じみた技により攻撃を回避し、タワーに向けて飛び去る際にその顔面にクロスさせた斬撃を浴びせかけ、タワーの壁にサーベルを突き刺し自身が落下するのを防いだ。この間数秒の出来事、さらに彼女は硬しか使っていない、つまり全ての行動に完璧なオーラの移動をこなしていたことになる。これはどこかで硬をする箇所を間違えた場合、サーベルが途中で止まる、踏込が足りなくなるなど、空中戦という翼を持たない人間にとつてそれは致命的な隙もしくはダメージとなる。しかし、彼女はそれらを完璧にこなし、ほぼ空飛ぶ象といった巨体の怪鳥をそれぞれたつた一刀のもとに切り捨てている。

「ちつ、まだまだゴミがいやがる。だがゴミどもめ、私に向かつてくるとは、：世界の広さを知らん！教えてくれるわ」

彼女は自分に向かつてくる敵が多いことに怒りの感情を増していったが、同時にとても満足していた。それもそのはず、かの存在の名言の一つをそこまで無理なく言えたのだから。だから、彼女は彼らを同時に愛おしくも思つていた。

怒りと愛が交わるとき彼女はとてつもなくハイになる。

「うふふふふふ、：最高だよ君たち、最高にくずだよ。だから、私が裁いてあげるよ。感謝して、感謝して死んでいけええ」

彼女は壁から離れ、今度は数十羽になるであろう大群に向け、彼らが視界から消えたと思うほどのスピードで突っ込んだ。

「ひぎやあ」「くぎゅう」「ぎやああ」

群れの中から突然悲鳴があがつたと思うと彼らの仲間は血を吹き出し墜落していく、そこに目を向けても何もない。彼女は彼らの背中、頭、羽を足場にして下へ下へと、階段のように利用しながら造られる道は、彼女の振るサーベルが月明かりに照らされ、血飛沫が合わさり、幻想的な軌跡を残していた。

彼女は相手の圧倒的有利な土俵ですら、彼らが闘うには何も意味をなさず、ゴミのように切って捨てられる光景はまさしくこの空間を支

配する絶対の王であり最強を名乗るのに相応しいものである。

最後の一匹を切り捨て地面に降り立った彼女は、

「ああああ、さいつつこおおおの気分」

ヒソカのことを変態と評したが、この周りに赤く染まつた木、何かが刺さっている木、赤い地面、赤い何かが地面にこびりついてる光景の中、一人恍惚とした表情を浮かべる彼女は、どうしようもなく同類であろう。

「さてと。何処から入ろうかしら」

落ち着いた彼女は、入り口を探し始めたのだが、数十秒ほど探し、「何処にも入り口がねえじゃないの。なめてんのかクソが、これは私に対する挑戦か、適当に切つて道を作れということだね。ヤツテやろうじやないの」

彼女の忍耐の緒は常人よりも短いため、一瞬にしてキレた。と同時に、

「試験の合格を確認した。少し左手側に歩けば入り口がある。そこから入り給え。もちろん壊したら失格にするよ」

「……ちつ」

こうして彼女はトリックタワー三番目の合格者となつた。

彼女は被害者だと言う。しかし、加害者ではないとは言わない

トリックタワーを無事に合格したのはゴン達を含め原作より一人多い二十五名であった。

ゴール後に25人の受験生たちはタワーを出ると眼前に一人の男がいた。

「諸君、トリックタワーを脱出おめでとう。残すは第四次試験と最終試験の二つだ」

目の前の男がそう言うと、その男が試験官であるか、その関係者であるのを理解し、受験生はハンター試験が終わりに近づいたことを感じた。

「第四次試験会場は諸君らの目の前に見えるあの島、ゼビル島に行う。そこで、くじを引いてもらう」

「クジなんか引いて、どうするんだ？」

男の発言に疑問を感じたのか、53番ポツクルがその疑問を問うた。

「諸君らに狩るものと狩られるものを決めてもらうためだよ。では、攻略が1番だつた者から順次この箱からクジを引いてもらおう」

男がそう言うと、真ん中に四角い穴が開いた箱が運ばれ、最初にヒソカがその箱に手を突っ込みクジを引いた。ヒソカが引いたクジは四角いカードであり、片側に白いシールが貼つてあり、何が書いてあるのかを分からなくしていた。そして最後のトンパがクジを引き終わると、

「さて諸君、全員引き終わったようだね。では、シールを剥してくれたまえ」

皆がその発言を聞き、シールを剥しそこに書いてある数字を確認すると、

「それが、諸君らのターゲットだ」

一瞬でその発言の意味を理解した受験生のほとんどは自身のナン

バー・プレートを懐などに隠した。もちろん例外は存在しており、ゴンは自身のターゲットがヒソカであることで頭がいっぱいであつたし、キルア、ギダラクル、ヒソカ、そして彼女は自分に絶対の自信を持ち隠す必要性を感じていなかつた。

「諸君らはこれから一週間あの島でサバイバルをして貰う。そこで相手から合格点分のプレートを奪い最後の日まで保持し続ければ合格だ。そして、ターゲットのプレートは三点、自身のプレートも三点その他のプレートは一点とする。諸君らに必要な点数は六点。つまり、ターゲットのプレートを一枚かその他のプレートを三枚手に入れればよい」

周りのハンターは記憶を頼りに自身のターゲットを探しているのを、男は見て、

「では理解したかね。それでは健闘を祈る」

ゼビル島に向かう船に受験生を乗せ、そこで案内を務めることとなつた案内嬢のカラは、島に降りる順番、基本的なルールの再確認、来年の受験資格について説明していたが、とてつもなく辛氣臭い雰囲気で、明るく振る舞う自分が馬鹿な様に思えたが、プロ意識のなせる業か、最後までやり切つた。そして、ようやく島に着くと、

「それでは試験開始とさせていただきます。第三次試験のクリアタイムの早い方から下船していただきまゝす。一週間後に六点を持って現れた方を合格者といたします。それでは、一番のお方スタート」

第四次試験が始まつた。

「時間になりました。三番目のお方どうぞ」

カラに促され彼女は堂々とした足取りで森の中に入ると思いきや、そのままそこで立ち止まり道の脇に腰かけた。

「えへと、どうかなされましたか、402番セリム様」

「何、わざわざ下等生物を狩るのにこちらから出向くのは余りにもお

かしいので、ここで待たせてもらうだけだよ。そいつを狩つたら適当に寝床でも探すわ。」

『なんで、強い奴はこうも頭のネジがぶつ飛んだ奴ばかりなの』

「えへと、…………次のお方どうぞ」

ラカはこれ以上イカレタ人間と付き合うのが面倒くさくなつたのか、無視して仕事に戻つた。

「ちよい待てい。普通におかしくね。あんた何か言えよ」

「ルール上問題ありませんので。それよりスタートですよ」

ハンゾーがあまりな事態に文句を言つたが、面倒くさいと感じていたラカはルールを盾に軽く流した。

「ちつ。仕方ねえな。おい、お前のターゲットは俺じやねえだろうな」「安心しなよハゲ、あんたじやないよ、自意識過剰なんじやない」

「なつ。むかつく野郎だな」

余りにも忍者らしからぬハンゾーの正直な問いに彼女は呆れながらもハゲがターゲットではないことを伝え、それを聞き安心したハンゾーは彼女の横を通り過ぎようとして……蹴り飛ばされ森の中に消えていった。

「「何で!!」」

いきなりハンゾーが飛ばされたのを見て、残つた受験生全員は同時にツッコんだ。

「何でつて、ムカつくからに決まつてるでしょ。それ以外の何があるっていうのかしら」

『『ヤツベー。冗談抜きでこいつイカれてんぞ!』』

もの凄く理不尽な理由に全員船を降りた瞬間関係なく吹つ飛ばされる可能性を幻視して、彼女より遅くトリックタワーをゴールしてしまつたことを嘆いた。

「次の方どうぞ」

「「あれ見て、マジでそんなこと言うのかよ」」

カラの無慈悲な宣告を聞き、全員が突つ込んだが、

「53番。ポツクル様時間が押しているのでどうぞ」

「えつ、マジで」

「どうぞ」

「…………」

ポツクルはカラの圧力に屈し、船から降りた。全員には、その姿、ハンターになる道に向かつて歩く青年というよりも、処刑場へ向かい歩く囚人のようにみえた。未来を摑むために死神の前を歩くなど矛盾も甚だしいが、彼女がこの場に留まつた瞬間からここが試験会場ではなく処刑場になつたのだと、彼の背中から全員が感じ取つた。

「…………」

ポツクルはこんな序盤ながらも死を覚悟し、彼女の隣を横切つた。

「…………ふう」

無事に何事もなく横切れた彼は安堵のため息を吐き、足早に去ろうとしたが、

「パツとしない、弱い、帽子のセンスも全くないわね。童貞ね」

「…………」

ポツクルの足は何もダメージを受けていないはずだが、酷く震えており、上手く前へ足を出せなかつたのか転び、両腕を地面につけ、その顔は目深に被つていたせいでどんな表情をしているか分からないが、何かを我慢するようにその両拳は強く、それは血が滲むのではないかと思うほど強く握られていた。そのあまりに哀愁漂う姿を受験生は誰も直視できず、レオリオに至つては、同じような経験があるのか、天を仰ぎ見ていた。

「次の方どうぞ」

「「鬼か貴様!!」」

カラの余りのタイミングに全員ツッコんだ。しかし、宣言が変わることもなく死神のまえに足を運ばなければならなかつた。

しかし、ハンゾーとポツクル以外のモノには何もせず、残りの受験生達は心も体も無事に済んだ。そして

「次の方どうぞ」

『おい、もう残り十人を切るぞ。誰がターゲットなんだ』

レオリオが余りの緊張に耐え切れず、隣のクラピカに小声で話しかけたその時、首が宙を舞つた。

「プレートをゲット。んじゃね」

彼女は目当ての人物が船から降りて、その両足を地面に付けた瞬間に彼女はサーベルの間合いに彼を捉え、その命を一瞬のうちに刈り取り、その目的の24番のプレートを彼の服から抜き取り、手に入れる去つた。

「気を付けねばならないな、レオリオ」

「のようだな。クラピカ」

彼らの様に口には出さなかつたものの、残りの受験生も同様に思ひ、気を引き締めていた。

「いやう。幸先がいいねえ。さてと、あと丸々6日と少し、どこで過ごそうかな？」

彼女が上機嫌で森の中をかけるが、なかなか良い所が見つからないのか、だんだんとイラつき始め、意味もなくサーベルを抜き徘徊し、時間だけが過ぎ太陽が沈むころ、

「ああああ、全然快適そんなところがねえな、畜生が。さつきから監視している試験官もうざいし、草も木も邪魔くせえなう。やろうかな、ツ!!」

彼女が怒りに任せて自然破壊を行おうとした時、彼女は急に体を右に傾けながら後ろにひねり、腰から抜いていたサーベルに硬を行い、三度、まさしく目にもとまらぬスピードで振るつた。

「キン」「キン」「キン」

そうすると、彼女のサーベルから何かが切られ弾かれ、彼女の上半身があつた場所にも何かが通り過ぎていた。そして彼女の背後からは木に何かが刺さる音がして太いとは言えないまでも、決して細くない木の幹が折れて倒れる音が続いてした。

「ああああ、もう、本つとうに最悪、なんなんだよクソが、畜生畜生畜生がアああああ」

彼女はそう叫ぶと、走れ出し、未だに飛んでくる針を切り弾き避けでは、その原因に向かつて走り、邪魔な木を切り倒し、目隠しとな

がら、木の幹を飛んだりして攻撃を避けつつも真っすぐに突き進み、攻撃の主である、モヒカン銃男のギダラクルを発見し、

「お前がああああ、この肩があああ、ぶつた切つてやるううう。死ね氏  
ねしねシネd e a t h」

「うわ、はや。これは面倒くさいし、契約外だね」

彼女のサーベルの間合いで後数メートルの段階でギダラクルは針を投げつつも体は逃げの態勢に入っていた。

「逃がすか。このゴミが、私の愛を受けるがいい」

彼女が彼の攻撃をものともせず自身の間合いへと彼を捕らえた。ちなみにだが、彼の針は木を碎く勢いを持つほどの破壊力を秘めており、通常ならば、その針のスピードについてこれず串刺しになるか刀に当たれても運が良くて刃が刃こぼれし、そうでなければ折れてしまうほどのものである。さらに夜なのでその厄介さはけた違いであるはずだが、彼女は全ての攻撃をただの一度たりとも服にすらかすらせていないのである。

彼を捕らえた彼女は回避不可の一撃を繰り出した。

「何！」

しかし、驚きの声を上げたのは彼女であり、彼は彼女を監視していたであろうハンター協会から斡旋された試験官を盾代わりに利用して、その一撃を回避したのである。

「あ～あ、やつちやつた。試験官を殺すと失格になるよ。去年それでヒソカが失格になつたし。」

「テメエノせいだらうが」

「どちらでもいいけど、死んだら君のせいだよ」

「あつ、こら、待ちやがれ」

「じゃあね」

彼女に試験官の死を押し付けて、動搖した隙に彼はサッサと逃げた。

残された彼女は、すぐその後に試験官が死に、こんなことでまさか失格なのかと、死んだ試験官とギダラクルに対して丸一日中一睡もせずに怒りをぶつけていたが、その後2、3日たつても失格の知らせが

来ないことを疑問に思い、同時に彼に騙されたことを理解した。

彼女が叫ぶことになつた原因は、彼女から逃げ切つた後、ヒソカに合流して、文句を言つた後、地面に潜り寝ていた。

合流して、文句を言つた後、地面に潜り寝ていた。

「やつぱり、とても美味しそうだなあ ♡ 、ああ、我慢できない ♠ 」  
この後、変態が滾りすぎゴンがプレートを取ろうと、後を付けていたため、その途轍もなく氣色悪いオーラを浴び、トラウマに成りかけたのは可哀そうとしか言いようがなかつた。

## 彼女は正義を執行する

第四次試験の終了を知らせるアナウンスがゼビル島に響き渡ると、合格条件を満たした受験生がスタート地点へと戻ってきたのをカラは確認次第、改めて点呼をとり、

「以上この十名が第四次試験の合格者となりまゝす」  
長く陥しかつたハンター試験も残すは最終試験のみとなつたのである。

第四次試験を終えて受験生たちは最終試験会場に向かうため飛行船に乗り込みくつろいでいた。

その頃飛行船のある一室で、ハンター協会会長ネテロ、一次試験官サトツ、二次試験官ブハラ、メンチ、三次試験の時にいた男と秘書のマーメン・ビーンズが集まり食事をしながら、ネテロは愉快そうに笑いながら、

「十人中七人が新人とは、豊作豊作」

「こんなことつて前にもあつたんですか？」

初めてハンター試験の試験官になつたブハラが、不思議に思い質問した。

「うむ、たいがい傾向があつての、十年くらいルーキーが出ないとしたら、突然湧くように若者が集まりよる。儂が会長になつてこれで四度目かの」

会長が答えた後、サトツは聞いたかったことを質問した。

「ところで、最終試験はいつたい何をするんでしょう」

「ああ、そうそう。まだ僕らも聞いてなかつたですよ」

「うむ、それなんじやが。一風変わつた決闘してもらうつもりじゃ」

「一風変わつた決闘？」

「まず十人それぞれと話がしたい」

通路にて、ゴン、クラピカ、レオリオの三人は集まっていた。そこではレオリオが今まで二人に助けられたことについて恥ずかしそうに感謝の言葉を伝えていた。

レオリオのいわゆるデレした発言を聞き、ゴンとクラピカはお互に顔を見合わせて、同じ気持ちであることを確認していたところ、「ハンター試験の受験者の皆様にお知らせします。これより会長が面談を行います。番号を呼ばれた方からお部屋にお越しください。では、受験番号44番ヒソカ様から」

ゴンはヒソカという単語に反応し顔が固くなつた。それを見たクラピカは彼がヒソカの番号札を第四次試験で所持していたのを思い出し、さらにその試験の際、彼の様子が合流してから一時おかしかつたのを思い出し、彼の横顔をじつと見つめていた。

呼び出されたヒソカは部屋に向かい、何の躊躇もなく入つた。そこにはネテロ会長が一人座り書類を眺めていた。

「まあ、座りなされ」

ヒソカは座らずに疑問を投げかけた。

「まさか、これが最終試験？」

「全く関係ないとは言わんが、参考にするためにちよいと質問する程度のモノだよ」

それを聞き、部屋に入ったときから開いてた瞳孔とは別に、その口が嬉しそうに一瞬ゆがむと元に戻り、ネテロ会長の前に机を挟んで片膝たてて座つた。

「まず、なぜハンターになりたいのかな?」

「別になりたくもないけど♦」

「ほう?」

ヒソカの正直な問いに、ネテロは顔を上げて、その顔を見た。

「資格があるととても便利だから♣」

「ほう、例えば」

「例えба、人を殺しても免責になる場合が多いし♠」

「成程。では次の質問じや」

ヒソカの衝撃的なハンターライセンスの使用例にも動じず、そのま  
まネテロは次の質問に移った。

「お主以外の九人の中で今一番注目しているのは？」

その質問を受けヒソカは、その顔に笑みを浮かべ

「402番」

「ほう」

「99番と405番も捨てがたいけど、一番は彼女かな、いつか手合わ  
せ願いたいね♥、フツ、フ▣▣◆」

ヒソカはとても楽しそうに笑つた。そんなヒソカにやはりネテロ  
は動じず、

「では最後の質問じや。九人の中で今一番戦いたくないのは？」

「それは、405番だね♦99番もそうだけど♣」

「ああ」

「今はまだ戦いたくない、という意味では405番が一番かも♠」

「なるほどのお」

そこまで言うと、ヒソカは今まで漏れででいた殺気を隠さずにだ

し、ネテロ会長にぶつけて、

「ちなみに、今一番戦つてみたいのは、あんたなんだけどね♦」

「ふむ、ゞ苦労じやつた、下がつてよいぞ」

ネテロはそんな一般人が死を幻視してぶつたおれ、命の危険すらあ  
りうる殺氣をものとせず、質問の内容を記入するためか下を向き、  
紙に筆を走らせ発言した。

その後、部屋からでたヒソカは、彼にしては珍しく苦いといった感  
情を微かに表情に出し、食えない爺さんだと内心思いつつ、足を止め  
部屋を振り返りつつ、

『あまりに隙だらけ過ぎて毒氣を抜かれちゃつたよ♦』

今度は笑みを浮かべ、去つていった。

そこから、会長は同じような質問をしながら彼らのことを紙に記入

していつたが、402番のところで、

「なぜ、ハンターになりたいのかね？」

「証明するため、死ねクソ爺」

「ふむ、何を証明するためか聞いてもよいかの」

「私を…だ。変態爺」

「では、この九人の中で一番注目してるのは」

「いるわけないでしょ。でも、44番と301番の二人はかならず殺す。というか爺、いい加減にしろよ、本当に殺すわよ」

「では、一番戦いたくないのは」

「294番のハゲ。イラついて戦闘になれば確實に殺しちゃうからね。というか、あんた切ってもいい、いいんだよねえ」

「ふーむ。なるほどのうう。最後なんじやが」

「何、斬りたくなるから早くして」

「スリーサイズは」

彼女の頭から何かが切れる音がした。

そもそも、なぜネテロがこのようなことをしたかというと。彼女が上はサラシのみで、下は何かの布をスカートの様にして腰に巻いただけという扇情的な恰好であり、そして厚手の布であつた軍服とサラシのおかげで隠れていた彼女の身長の割にある胸とキュツとしまつたくびれ、形の良い尻、引き締まつた足が曝け出されていたのだ。なぜその恰好なのかは、第四次試験で汚れた服を洗濯し、その間下着姿はさすがにまずいと思い適当にそこらにあつた布を腰に巻き付けて、乾燥機に入れ、乾燥の終了を待つてゐる間に呼ばれたためであり、同時にネテロの隠すことのない視線にイラついていたのだ。

そのため、ネテロの言葉を途中で遮るように、左側に置いていたサーベルを握り、瞬時に抜刀した。

「死ね。エロ爺」

「なんの」

しかし彼女の斬撃はネテロに掠りもせず机を真つ二つにしただけであった。彼女がサーベルを握ると同時にネテロは膝立ちになり、そのまま体を半歩後ろにずらして彼女の間合いから逃れたのである。

「眼福眼福、やりおるのう」

「……」

「うひょつ」

彼女は無言でサーベルをフェイントを交えながら数度振り、さらに座布団を同時に彼の顔に蹴り投げ、視界を封じつつ殆ど予備動作なく、サーベルを投げた。

しかし、さすがと言えばよいのか。ネテロはその斬撃の全てを手の平に硬することにより弾き、受け流し、最後の一撃も、真剣白刃取りをして見せるなど茶目っ氣を見せつとも、ふせぎぎつた。

『クソ、変態爺とはいえ、さすがは人類最強ということか、しかしその称号を名乗つていいのはこの私のみ。ふざけんなよクソ爺。ここでやつて、ヤツテ、殺りまくれば証明できる。：眼帯を外すか』

彼女の思考が危険な領域に踏み込み、躊躇が無くなろうとしていた時、

「お主、これ以上すると失格になるぞ。儂は楽しいし目の保養になるからええが、お主は大丈夫かの」

「……」

ネテロの言葉にギリギリ残っていた彼女の理性が反応し、ここまで来て落ちるのは馬鹿らしく、最強の自分がハンター試験ごときに落ちることを予想し、さつき以上に怒りの感情が沸いたため、彼女はギリギリ眼帯を外すのは踏みどどまつた。

「死ね、エロ爺」

それだけ言うと、彼女は部屋から出てつた。

「あの若さで、あれほどの剣術と体術、それに念の練度、末恐ろしいの。じゃが」

ネテロ会長は彼女の戦闘能力に戦慄を覚えながらも顔を締め、

「素晴らしい、体じやつたのう。うむ、眼福眼福」

「眼福じやないですよ会長。どうするんですか、これ」

ビーンズが隣の部屋から騒ぎを聞きつけやってきて会長がやらかしたことを、部屋を見て瞬時に理解して、何時ものように自由すぎる彼に小言を挟むのであつた。

余談だが、結局時間も代わりの部屋もなく、残りも3人なので、そのまま続行となり、クラピカとレオリオは部屋に入るなりその惨状を見てこれから何が起こるのか分からず、ネテロから質問されるまでの間、無意味な緊張を強いられることとなつた。ちなみに、ゴンはさすがは主人公と言えばいいのか、気にせず面談をし、ネテロの中で地味に評価をさらに上げていた。

彼女の目からは逃れられない

面談を終え、その結果を紙にまとめたネテロは、「思つたより偏つたの」

しかし、何か思いついたのか、楽しそうな顔をして、部屋を出て行つた。

クラピカは面談が終わり、ゴンの様子が気になり探していたところ、夕焼けを一人眺めるゴンを発見した。

「ゴン。いよいよ最終試験だな」

「うん」

しかし、ゴンはいつもの様な元気な返事をクラピカには返さず、また顔を夕焼けに向けてしまつた。ゴンの視線の後を追いながら、その様子を見てクラピカは本題を切り出すことにした。

「ゴン……」

「うん？」

こちらから再度話しかけても生返事で、こちらを今度は向かなかつたゴンに対して、クラピカはその様子が気になり、一緒に外に向けていた顔をゴンの方へ向け、

「やはり、四次試験の時になにがあつたのか？」

「……」

何も返事を返さないゴンを見て、自身の考えに間違えがなかつたことを確認したクラピカは話し続けた。

「合流した時、様子が少しおかしかつた。ゼビル島をでてからも様子が変だつた」

クラピカは心配そうに言い、事情をゴンが話してくれるのを待つた。

「……俺のターゲットがヒソカだつたんだ」

「なつ…………」

クラピカは驚いたが、同時に疑問を抱いた。ゴンが合格時にプレー

トを二枚しかもつていなかつたことに、

「…一度はヒソカから隙を突いてプレートを奪つたんだけど、俺も他の奴に付けられていて、毒矢にやられたんだ。結局ヒソカがそいつからプレートをうばい返して自分のプレートを俺の前に置いて行つたんだ。貸しだとか言つたんだ」

ゴンの言葉を聞き、ヒソカの行動にクラピカはビックリした。

「ヒソカが？」

「いらないつて言たら、ぶつ飛ばされて、『今の様に一発僕の顔にぶち込むことが出来たら受け取つてあげるよ』て言われた。…やり返せなかつた自分がすごく悔しくて…」

ゴンは肩と声を震わせながらの発言を聞き、クラピカはゴンの様子を観察すると、その頬に涙が流れていることに気づき、ゴンがどれほど悔しかつたのかを感じ、今までの様子に納得がいった。

しかし、クラピカはその気持ちを理解できても、ゴンに掛ける言葉が見つからず、ただ綺麗な夕焼けを見つめた。

そうしていると、ゴンが顔を腕で拭い、顔を上げ、その顔に微笑みを浮かべ、

「そしたらさ、その後無性に情けなくて、寂しくなつてさ。余りにも自分の力が不足しているような気がして、だから誰かと一緒にいて、誰かの役に立ちたかった。それで、二人をさがしまわつていたんだ」

「ゴン…」

なぜ、ゼビル島でゴンが余りにも無茶なことをしたり、こちらを手伝おうと必死になつっていたのかという疑問が解けたクラピカは同時に彼に掛ける言葉を見つけた。

「お前がいたからこそ、私も、レオリオもここまで来れたと思つている」

そこで、一息つき、ゴンの顔を見つめ、

「本当に感謝している」

ゴンはクラピカの言いたいことを理解し、普段通りの様子に戻り、「俺の方こそ、ありがとう」

二人の友情の絆による感動的シーンであつたが、その間彼女が何を

していたかと言うと…………、

乾燥した服を着て、乾燥機の性能が悪かつたせいであのような事態が起きたと考え、乾燥機に対して理不尽な怒りを向け、ひたすら蹴りまくり、最後は切り刻んでしまった。

しかも、乾燥機がある部屋はゴンとクラピカが会話していた通路に近く、その音は彼らの耳に届いていた。

さらに、その音を聞きビーンズが駆け付け、

「何をしていらっしゃるのですか！ 壊したら駄目じやないですか」  
ビーンズの叫び声が通路に響き。それに対し、彼女は力強く、「この乾燥機がわるいのよ！ それと、当然こうしたことに後悔はしていないわ」

それを聞き、ビーンズは

「当然のように言わないでください。後悔もちゃんとしてください、つて、そうじやないです。後悔ではなく、反省をしてください。：あれ、ちょっと待ってください。まだ話は終わってませんよ」

彼女は、さすがに少し悪いと思つたのか、ビーンズに対して怒りの感情を向けずに、そそくさと去つて行つた。

そして、自由人ネテロの秘書である苦労人のビーンズの慌てた声が響いた。

それを聞きゴンは笑い、完全にいつもの調子を取り戻し

「最終試験がんばろうね、クラピカ」

「……ああ」

クラピカはどうにも釈然としない感情を抱きながら返事をしたのである。

「むん！」

飛行船のある一室でネテロがふでを持ち、紙に何かを書き上げていた。

「これで良し」

その紙を丸めて持ち、試験官達を待たせている部屋へと歩き、その

部屋に入るなり、

「待たせたのう、組み合わせが出来たぞい」

そう言うと、ネテロは丸めて持っていた紙を両手で全員に見えるよう広げた。

「えつ！」

「それは！」

「…………！」

「かつ、会長。これ本気ですか」

全員がそれを見て驚愕の表情を浮かべ、全員の気持ちを代弁するようブハラが問いかけた。

「ほつほつほ、おおマジじや」

全員の反応を見て、いたずらに成功した悪ガキの様な顔をしながらネテロは楽しそうに笑った。

「確かに、本気の目ですね」

サトツが言うと、

「本気の目なんだ、あれ」

メンチがツッコミ。

「これで勝てば、晴れてハンターの仲間入りじや」

ネテロが相も変わらない顔をしてその場を締めた。

次の日、最終試験会場に全員が集まると

「さて諸君、ゆっくりと休めたかな。ここは委員会が経営するホテルじゃ。すべての試合が終了するまで貸し切りとなつておる」

ネテロがそういうと、布に包まれ何が書いてあるのか分からない

ボードが集まつた受験生の前に運ばれてきた。

「では、最終試験じやが。一対一のトーナメント形式にて行う」

ネテロがボードの布を剥すと、誰と誰が戦うかがシールで隠されたトーナメント表がてきた。

「つまり、勝ち残つた最後の一人が合格つてことか」

レオリオがそれを見て結論を下したが、

「いや、たつた一勝で合格である。つまり、勝ち抜けのトーナメントであり、最後まで負け続けた一人が失格じや」

そう言い、シールを剥すと、第一試合はゴンとハンゾー、彼女ことセリムとヒソカの試合が組まれ、第二試合はゴンとハンゾーの試合の敗者とポツクル、彼女とヒソカの試合の敗者とクラピカの試合が組まれ、第三試合はポツクルとの試合での敗者がキルアと戦い、クラピカとの試合での敗者がポドロと戦う二試合が組まれ、第四試合はキルアとの試合での敗者がギダラクルと戦い、ポドロとの試合での敗者がレオリオと戦う二試合が組まれ、最後に第四試合での敗者同士の試合が組まれ不合格者が決定するトーナメント戦となり、かなり偏った試験内容となっていた。

「安心するがいい、誰にも二回以上戦うチャンスがある」

ネテロが受験生の反応を見ながら発言したが、

「そうは言つても、294番と405番、44番と402番はチャンスが五回もあるぜ」

ポツクルが文句を言い、

「組み合わせが公平でないわけは？」

ポドロが質問した。

「うむ、当然の疑問じやな。この試合は、これまでの試験の成績を基に決められておる。簡単に言うと、成績の良いものにチャンスが多く与えられておる」

ネテロがその質問に答えた時、後半の発言を聞きキルアがハツとし、

「それって納得がいかないな。もつと詳しく点数の付け方教えてよ」

キルアがネテロを見つめながら聞き、ネテロも目を閉じ思考をしたかと思うと、

「ダメえええ！」

ネテロが人を馬鹿にしたようなアホウなツラでキルアに向か、否定をし、「なんでだよ！」

キルアが若干キレながらも聞き返した。それに対し笑いながら、

「採点内容は極秘事項じや。全てを言う訳にはいかん。じゃが、やり方くらいは教えてやろう。先ず、審査基準は大きく三つ。肉体能力値、精神能力値、印象値からなる。身体能力値は、敏捷性、柔軟性、耐久力、五感能力などの総合値。精神能力値は耐久性、柔軟性、判断力、想像力などの総合値からなる。じゃが、これはあくまでも参考じや、ここまで来れたものにそれらが大きく欠けていることは無いからの。しかし、最も重要なのが印象値じや。これは即ち前に挙げたモノでは測れない何かじや。言うなれば、ハンターの資質調査と言つたところかの。それと、諸君らの生の声を吟味した結果こうなつた。以上じや」

キルアはそれを聞き、

『試験の結果なら俺の方が上のはず、資質でゴンにおれが劣つてる』  
キルアがそう思考していた時、

『ヒソカとか、あのクソ爺やりやがつたな。しかし、どうする。奴に降参は絶対に嫌だけど、奴を降参させるのも、難しそうだし。ほんつと、やつてくれたよ。あの顔に一発ぶち込みたいね。とにかく、ヒソカは腕一本切ればいいだろ。……待てよ、ヒソカは幻影旅団に嫌われキヤラ、ならば、ここで殺しても問題ないし、欠員補充で私が選ばれる可能性がある。……なら、ハンターになる必要はない？……！殺しても問題ない！』

彼女はネテ口に殺氣を飛ばしながら物騒な結論に至つた。そんな彼女のことを気にせずネテ口は説明の続きをした。

「戦い方は至つてシンプルじや。相手に参つたと言わせたら勝ちじや。もちろん殺しあは法度じや、失格とし、その時点で最終試験を終了とする。戦闘は武器の使用は o k a y じや」

そこで、説明が終わり、最終試験の開始が合図された。

第一試合のゴン対ハンゾーの試合はゴンが驚異的身体能力を見せるもの、長年鍛錬をし続けたハンゾーの実力を前に意味をなさず、一方的な試合となり、レオリオがハンゾーに対しキレながらも、審判

から介入は即ゴンの負けを意味すると聞き動けずにはいると、「ハゲ、流石になげーぞ、降参させれないならあんたが降参すれば、時間の無駄だし、見ていて退屈だわ。というか、アンタ本当に忍者？期待していたのと違い地味ね。派手なのは頭だけかしら。なら、サッサと死んでくれない、さつきから太陽光が反射してピカピカ光ウザいんだよね」

「ハゲじゃない、これは剃っているだけだ。というかうるせえぞ」彼女がハンゾーに文句を言い、ハンゾーがキレて言い返し、腕に力を入れてしまつた。この時、彼はゴンを下敷きにして拘束をして降参するように説得しようとしており、腕を極めていたので、

ボキ

「…つあ、くつ……」

ゴンはいきなり腕を折られたが叫ばなかつたが、激痛がその体に走つた。

「しまつ、…さつさと降参しちまいな。次は腕だけじやすまないぞ」「今更眞面目ぶつても、というかしまつたつて言わなかつた。かつこわり」

「うつせえぞクソ女」

「ハゲが誰に対しても物を言つてる！」

余りな事態にハンゾーに対して怒りの感情を抱いていたレオリオだが、ツツコみ処を失いクラピカの方を見た。

しかしクラピカも、どうしていいか判断が付かなかつた。

ハンゾーもこのままでは格好がつかないと思つたのか、いきなりゴンから離れ、片手人差し指で逆立ちをし、目をつぶり自身の凄さを象徴しつつ、

「俺は忍びと呼ばれ、忍法という特殊技術を会得するために特殊な訓練を幼少の時期から叩き込まれ、以来18年訓練し続けてきた。お前の年には人を殺している。殊格闘に関しては今のお前じや勝ち目がねえ」

ハンゾーが自慢げに自身のこと長々と話している間に、ゴンはある程度回復し、彼の頭めがけて蹴りを放つた。

「ないシユー」

彼女は満足げにそう言い、レオリオは、

「ゴンそこだ、もう一度蹴つて、蹴つて奴を殺るのだ！」

「レオリオ、殺しは敗北だよ」

冷静にレオリオにツツコむクラピカだったが、ハンゾーがゴンを痛めつけたことがやはりあまり良く思つてなかつたため、ゴンが彼の頭を蹴つて、スッキリした顔をしていた。

倒れていたハンゾーが素早い動きで起き上がりながら、軽く距離をとると、

「わざと蹴られてやつた訳だが」

顔から鼻血を出しながら言つた。

「嘘つけ！」

「カツコ悪。私の忍者を汚すなモドキが！」

即座に、レオリオと彼女からツツコまれ、

「外野は黙れ。あと、本物だ。……今度は腕じやすまないぜ」

無理やり、雰囲気をシリアルスに戻し、表情を引き締め、隠していた剣を取り出し、

「今度は足を斬る、さつき腕を折つたのとは違ひ取り返しのつかないことになる。これは命令だ。降参しろ」

殺氣を滲ませながらゴンの顔に突きつけ、降参を促した。

「それは困る」

全員が呆けた。いや、彼女は笑つていたが。

「足を切られるのも嫌だ。でも降参するのも嫌だ。だからもつと別のやり方で戦おう」

「自分の立場分かつてんのか！」

ゴンの発言を聞き、ハンゾーは怒り、他のモノは苦笑もしくは普通に笑つた。彼女は大爆笑していた。そして、ハンゾーは忍者と言うよりもチンピラの如き恫喝を行うも、

「それでも俺は参つたとは言わない。それにもし俺の足を切つて出血多量で俺が死んだらこの場合ハンゾーさんの負けになるよね。それじやあお互い困るでしょ。だから、考えようよ」

「ううううつ」

ハンゾーは歯をギリギリ言わせながらどうしようもできなくなっていた。

その中、キルアは不思議に思っていた。ゴンが強くなつたわけでも、ハンゾーが弱くなつたわけでもないのに、さつきまでの殺伐とした雰囲気が壊れたことが理解できなかつた。

しかし、ハンゾーはゴンの顔に少し剣を突き刺し、死んだら元も子もないことを言い、自身は来年があるが、死んだお前にチャンスはない、自分とゴンが対等ではないことを明示しつつ、今度こそ顔を締め、殺意を剣に乗せた。

「……」

ゴンはそれに対して無言で彼を見つめ続けるだけであつた。

「……何故だ？たつた一言言うだけだぞ。命より意地が大切だとでもいうのか！来年またうけりやあ、それで済む話じやねえか」

ハンゾーはゴンの目が絶対の死を前にしても搖るがないことに、顔から汗を滲ませつつ問いかけた。そこでゴンは自身がハンターをしている父親に会いに行くためにも自身がハンターになる必要があることを言い、

「ここで、諦めたらダメな氣がするんだ。だから、引かない」

「ここで死ぬとしてもか」

ゴンに再度問いかけるも、その瞳は濁ることなくただハンターになることと自身の夢のためにも曲げられない思いがそこには確かに存在していた。だからハンゾーは、

「参つた。俺の負けだ」

敗北宣言をした。：が、ゴンがその敗北宣言に納得がいかずごねて、ハンゾーがキレて彼をぶつ飛ばしたため、勝者が気絶し敗者が立つてているといういささか閉まらない試合結果となつた。

しかし、そのハンゾーも、キルアからなぜわざと負けたのかの質問を受け、自身の流儀がゴンのただ前を見る目を見た瞬間から貫けなくなつたこと、彼を氣に入つてしまつたことを理由として話した直後、彼は地面とキスをした。

「テメエがかっこいいこと言つてると何故だか知らんが怒りを覚える。次は私の試合だから敗者はサッサとどきな」

彼女により、頭をはたかれ、またもモミジを作る彼はどことん不憫である。

「44番ヒソカ様、402番セリム様、両者準備はよろしいでしょ  
うか」

最初の試験から少し経ち、この試験最も危険人物たちの試合が始まろうとしていた。

「ねえヒソカ」

「何だい、セリム♥」

「次名前を言つたら、その口そぎ落とすわよ」

ヒソカに名前（仮）を呼ばれ、気持ち悪かつたのか、それとも他の要因があるのかもしれないが、どちらにせよ、彼女は試合がまだ始まつてもないのに彼の口に向け、腰のサーベルを振りぬいた。

しかし、まだそれでも冷静であつたため、彼女は本気ではなく、ヒソカも余裕を持つて、下から上に向け、斜めに来る斬撃を体を前に傾けながら回避しつつ、そのまま踏み込みつつ拳を彼女の体に向け放つたが、彼女も本気で攻撃したわけでもないので、体の軸もぶれていないためサーベルを戻しつつも後ろに飛び退り、サーベルを正面に構えなおし、ヒソカも追撃をせず、トランプを数枚手に持つて彼女を観察した。

ここまでいきなり始まつた戦闘に、審判は慌てて下がり、「それでは、試合はじめ！」

そのコールを聞き彼女はヒソカに対し言いたいことを伝え戦うこととした。

「ヒソカ、あんたが降参するのが、私の勝利条件、アンタの勝利条件はアンタの頭が胴体と離れることよ」

「それは、どちらも僕の負けじやないかな♠」

「私がアンタに負けるはずないじやないか。それに、どつちでも変わ

らん」

彼女は言いたいことを言い終えたのか眼帯を外し、ヒソカに向かって全力で走り、その間合いに捕らえるとその首に向け躊躇なく残光しか残らないほどのスピードで振るつた。しかし、ヒソカも、彼女に向かつてトランプを投げており、その殆どは彼女のスピードに対処できず外れたが彼女が回避を行つたため、ヒソカを間合いに捕らえるのが少し遅れた隙にトランプに彼の念能力『伸縮自在の愛』<sup>パンジー・ガム</sup>を付与しつつ、多方向に投げ終わると同時に、彼女が目の前に来て、視線がその首に向いていたので、首に硬を行いつつ、『伸縮自在の愛』<sup>パンジー・ガム</sup>を発動した。

この念能力は、ゴムとガムの性質を自身のオーラに付与するものであり、接着も離すのも彼の自由であり、その有効性の割に、弱点がほぼない素晴らしい戦闘向きな念能力である。

これにより、自分とトランプを予め接着しておくことで、高速移動を可能としたヒソカは、それでも彼女の斬撃が彼の首を浅く切りつけたのに驚いていた。

『首に硬をしていかつたら、頸動脈は確実に傷つけられていたなあ◆ああ、やつぱり彼女は素晴らしいよ♥』

ヒソカは彼女が強敵であることを感じつつ、他に仕掛けたトランプにより、彼女を中心に六角形を描くようにして高速で移動しつつ、彼女に向け少しバラけるようにして四方八方から周を施し凶悪な凶器と化したトランプを数十枚投げつけた。

「私の目に死角などない。死ねヒソカ」

彼女は振り返ることもせずに体をそのまま正面に向けつつ走り、自身に当たりそうなトランプのみ右手に握るサーベルを後ろに振り弾くと、彼女が進行する方向にヒソカが現れ彼女は今度こそ、その首をはねるために右肩のサーベルを抜刀し、上段から首めがけて振り下ろした。

ヒソカは自身のトランプが完全に避けられ防がれたことにはそこまで驚いてはいなかつたが、これほど高速に動く自身の動きを完全に把握され今まさに必殺の一撃が自身を襲おうとしていることに驚愕していた。

『彼女の目はここまで高性能だったなんて ♣』

血が舞つた。

しかしそれは彼の肩からその胴体に向けて浅く切りつけられたことによるもので、彼は彼女の死角に入った時に念のため、もう一つの彼の念能力『薄<sup>ドツ</sup>キリテクスチャーラ<sup>リテクスチャーラ</sup>』を発動していた。

彼の念能力『薄<sup>ドツ</sup>キリテクスチャーラ<sup>リテクスチャーラ</sup>な嘘』はオーラの質感を様々なモノに変化でき、ヒソカは再現できる質感を多数持っている。

これにより、彼は自身の首からその体の一部を覆い、彼女の目はそれを見抜き違和感を感じたため、剣筋が鈍り、ヒソカは致命傷を回避できたのである。

彼女はそれでも右手の後ろに向けていたサーベルを前に振りヒソカが追撃できないようにし、体制を再度立て直し、左のサーベルを体の正面に構え、右手のサーベルは腰だめに構え半身で手元を見えにくくして、ヒソカの首を取ろうとしようとした時、

「降参。とっても残念だけど、僕の負けでいいよ ♠」

彼女にトランプを投げ、突撃を阻止しつつ、そう宣言した。審判はそれを聞き、

「勝者402番セリム。ハンター試験合格者第二号です」

「ちつ。殺し損ねたか」

審判は彼女の発言を聞きヒソカが降参してくれてよかつたと感謝にも似た感情を持つた。それもそのはず、彼女とヒソカの戦いでヒソカの投げたトランプは彼女が避けた時あらぬ方向へ飛ぶ。今回は偶然当たるという不幸な者はいなかつたが、長引けば分からなかつたであろうし、彼女も周りの被害など気にしないたちなので、切られる者も出た可能性があるだけに、彼女的には不完全燃焼であろうが、審判と受験生にはありがたいことであった。

「命拾いしたわね変態」

「ライセンスを手に入れた後、幻影旅団のことでの話し合おうよ♥」

「ふん！」

この後の試合は、第二試合を頭にモミジを付けていた物のポツクルに対しハンゾーが勝ち、ヒソカとクラピカはケガをしていてもヒソカが圧倒していたが、クラピカの耳元で彼の目がクルタ族の証である緋色の目になるほどの何かを囁き有利であつたはずのヒソカが降参をして勝者はクラピカとなり、第三試合はポツクルとの戦いがつまらないと感じたキルアが降参して勝者ポツクル、ボドロとヒソカはヒソカが終始圧倒し、最後はボドロの耳元で何かを囁き、今度はクラピカの時とは逆にボドロが降参した。

第四試合はボドロとレオリオの試合が最初に組まれていたが、ボドロの疲労を考慮してレオリオが試合の後回しを要求し、それが受諾され、キルアとギダラクルとの試合になり、ここでギダラクルは偽名であり、本名はイルミと言い、キルアの兄であることが判明し、試合の様子がおかしくなり始めた。

イルミはキルアがハンターに向いてないことを指摘し殺し屋であり、何も欲しいものがないことを指摘し、キルアはそれを否定し、ゴンと友達になりたいことを主張し、クラピカとレオリオがすでにゴンとは友達であることを叫ぶと、イルミは殺し屋に友達はいらないとして、ゴンを殺しに行くと言い、キルアに降参しなければゴンを殺すと脅されキルアは降参、その後、ボドロ対レオリオの試合となつたが、イルミに降参してから茫然自失としていたキルアがボドロの背後から襲い殺してしまうことになり、キルアの不合格となり、ハンター試験はキルアとボドロを除く8人を合格者として、終了したが、ことの顛末をサトツから聞いたゴンは、ライセンスについての説明を行つて、いる部屋に急いで行き、イルミに対し、キルアへの謝罪を要求し、それが無理ならキルアの居場所を聞き出し、説明会終了後、レオリオとクラピカと一緒にキルアを連れ戻しにゾルディック家に向かうことになる。

その一方、彼女はハンター試験後にヒソカと合流し、幻影旅団に接觸し、包帯男ことボノレノフと対峙していた。

## 彼女は微笑み人を殺す

ハンター試験に合格した彼女は、約束通り、ヒソカと幻影旅団のメンバーに連絡を取つてもらつていた。

「団長に了承してもらつたけど♦、一週間後になるらしいよ♠」

「ふうん、アンタつて誰にも嫌われているから、連絡取れるか心配してたけど、とれたんだね」

「流石にそれはないんじやないかな♣でも、暇だしこれから食事でもどう♥」

「嫌に決まつてんだろ変態、連絡先はこれだから集合場所と時間決まつたら連絡して」

彼女はヒソカにメモを渡すと足早に去つて行つた。そんな彼女を見て、

「振られちゃつた♠」

笑みを浮かべ、少しも気にせず、ヒソカも何処かに向かつて歩き始めた。

一週間後、ヒソカから連絡を受け取つた彼女は合流場所として空港に来ていた。

「ヒソカ遅いぞ」

彼女は約束の時間より、律義にも10分早く着いて待つていたが、ヒソカが逆に10分遅れてきたのに対し文句を言いつつ、待つている間に飲み干した缶ジュースを握りつぶし投げつけた。

「ごめんね♦、少し遊んでたら遅くなっちゃつた♥」

ヒソカは飛んできたモノを片手でキャッチしつつ、血の付いたハンカチと共に近くにあつたゴミ箱に捨てた。

「下らん事してんじやないわよ。どうせゴミだつたんでしょ」

「確かに面白くはなかつたけど♣、退屈しのぎにはなつたよ♥」

「やつぱり、そんなゴミより私を優先せんか変態！」

流石に、公衆の面前でサーベルを抜くのは後が面倒だという考えが

あつた彼女は、サーベルを抜きこそしなかつたが、代わりにさつきの缶のプルトップに周をしてヒソカに向け飛ばしたが、ヒソカもその程度は簡単に避けた。ヒソカが避けたため後ろのゴミ箱に大きな穴が開いて、ゴミを捨てようとしていた一般人は腰を抜かした。

「大丈夫だよ♦ 飛行船にはちゃんとまにあつたしね♠」

「ちつ」

後ろで騒ぎが起きていたが、二人は何事もなく会話を続け、搭乗口に向かっていった。

飛行船に乗った彼女は、飛行船の行き先がここから1～2時間で行ける距離では無いことに気づき、いやな予感がしてヒソカに質問した。

「ねえ」

「なんだい♣」

「幻影旅団との集合時間は何時だい？」

「だいたい後3時間くらいだね♠」

彼女は、右手に硬をした。

「次の質問だけど、この飛行機が目的地に着くのにかかる時間は？」

「三時間近くだね」

彼女は拳を握り席から立ち、ヒソカに狙いを定めた。

「最後の質問になるけど、集合場所まで空港からどれくらいかかる」「ゆっくり歩いて一時間だね」

「……」

彼女は無言で拳を振りぬいた。しかし、ヒソカは彼女と同様に右手に硬をしてこともなさげに防いだ。

「危ないなあ♥」

「あほか！ 団員になろうとするもんがいきなり遅れるとか常識知らずにもほどがあるだろうが」

「君が常識を言うと違和感があるね♠」

「ウツサイわ。殺すわよ」

彼女が拳を少し動かし、オーラの移動を行うと、何故かヒソカのオーラが揺らぎ、同時に彼は右手に微かではあるが鈍い痛みを感じ、彼女の手を掴む手を緩めてしまい、彼女はその隙に拳を開放し、すぐさまオーラを纏った拳を顔に叩き込んだ。

「どうやつたんだい♦」

「説明面倒くさいし、そもそもアンタに何かするなんて絶対ないわ」  
ヒソカは、自身の掌で起きた不可思議な現象に気を取られ、殴られたことを気にしていなかった。

「顔面殴られて、気持ちよさそうに笑うな、立たせるな。キショイだろうが」

「ん~、君はやはり美味しそうだねえ♥」

「……」

彼女は無視することにした。

そして空港から降りたヒソカと彼女はアジトに向かい歩き、

「流石はA級賞金首の幻影旅団、あそこにいるのは何となく分かるけど、何人で何処に潜んでるのが分かりにくいわね」

「君の目でも分からぬのかな◆」

「ふん! な訳ないじゃない。眼帯外せば分かるわよ」

彼女はアジトの前に着いたにもかかわらず、ヒソカと会話をしており、これから戦う者とは思えないほど無防備にも見えた。

そして、彼女は眼帯を外すと、何の躊躇なく扉を開け、

「こんにちわ幻影旅団の皆さん、今日からあなた達の誰かを殺して団員になる予定のセリムと言います。まつ、ようしくね! ゴミども」

飛行船の中でヒソカに常識を説いていた人物とは思えないほど非常識な挨拶をする彼女は、本当に幻影旅団に入る氣があるのか甚だ疑問である。

「ああん! いきなり何ぶつこいてやがんだ。殺されてーのかクソガキ」

ジャージを着こなし不良っぽい男、フインクスが当然の様にキレて

返し、体を殆ど出さない黒いローブを着たフェイタンが後ろから現れ傘の先端を、いきなり現れ不快なことを言つた彼女に突き刺そうとして、

「あなたが私の踏台かな？」

フェイタンは嫌な予感がして、下がった瞬間、彼の服は切り裂かれ胴体から血が噴き出した。

「あの程度じゃあ流石に殺せないか」

「この、クソが！」

フェイタンは自身が完璧にころせたと思った瞬間にきた彼女の斬撃に対し、致命傷を回避するのが精一杯であった彼は、相手が本気じやなかつたおかげで助かつたのだと理解し、怒りが理性を焼き、彼の念能力を発動させようとしたが、

「落ち着けフェイタン、ファインクス」

団長であるクロロの声を聴き、理性が戻つたのか、悔しそうに彼女を人が殺せるのではないかという程の視線を送りつつも、他の団員が座っている瓦礫の山に座つた。

「そいつが、新たな旅団候補かヒソカ？」

「そうだよ♥、実力は見ての通りだし、性格も問題ないでしょ♠」

クロロが他の団員に状況を分かりやすく説明するために質問し、ヒソカも先の戦闘で実力の面で問題ないことを示しつつ肯定した。ただし、性格は蜘蛛と言う悪事を働く者にとつて問題なくとも、旅団のメリットになるような性格では決してなかつたが、ヒソカは一言でまとめていつた。

「確かにそうだが、今は欠員もいないで、ヒソカ。それとも貴重な念能力でも持つてているのか」

「確かにそうだね♣、ねえ、君の念能力は僕あまり知らないんだけど説明してくれない♦」

「この目だ」

彼女は簡潔に二人対して説明した。

「……」

「……」

簡潔すぎである。まだ説明が続くと思っていたクロロヒソカは何も言えず沈黙し、彼女も説明し終わつたと思い、口を噤んだため、奇妙な沈黙が生まれた。

「それだけか？」

「ただけだ」

「何も分からんのだが」

「頭良さそうな見た目して案外バカなの。念能力の詳細をペラペラ話す奴がいるか！ そこの変態はほつとくとしても」

「酷いなあ ♠」

「……」

クロロは続きを促したが帰ってきた言葉が罵倒であり、同時にこいつは本当に幻影旅団に入る気があるのだろうかと疑問を抱いた。

「能力も分からねー奴を旅団員にできるわけねーだろーが！」

「そうネ、役立たず、イラナイネ。バカ、ウボオーノブ、ファインの三人で十分ネ」

「そうそうつて、何だとゴラ！」

彼女の態度にイラついていたファインクスとフェイタンが彼女に対して文句を言つた。途中フェイタンはファインクスにも喧嘩を売つていたが。

「二人とも黙れ。だがまあ、そういうことだ。言えないならここで、死んでもらう」

「ちつ……。この目はオーラの移動を絶対に見逃さない。だから、絶だろうが、陰だろうが、この目に映れば見破れないものはないし、それを利用し相手の念の破壊もできる。つまり除念も可能だ」

彼女は仕方なく、嘘ではないが、全てを言わずに貴重そうに見える部分を言つた。

「「！」」

「ほう」

「へえ♦」

彼女の念能力を聞き、旅団員は驚き、團長も興味を示し、ヒソカは飛行船で起きた現象の理由が分かり、感心していた。

「それは確かにすごいな」

クロロは彼女の念能力を奪いたくなっていたが、さつき彼女が見せた戦闘能力から、生かしておくことができないことを想像し、奪うことは諦め手元に置くことにした。

だが、彼女の目は確かに高性能だが、クロロやヒソカ、その他の団員が思うようなことはできない。と言うのも、念の破壊と言つても、弱点みたいなモノを見つけるだけであり、戦闘中にそこを突くのは至難の業であり、普通に避ける、あるいは力業でぶつた切る方が安全であり、仮に実行するにはしてもかなりの怒りと愛の感情とオーラが必要であり、コストパフォーマンス的にまずしない。

ヒソカの時は、単なる硬による掴みだつたので、動いてもおらず、オーラを軽く揺らして硬を一瞬維持できなくさせればよかつたためできた芸当なのである。

さらに、除念に関しては、できなくはないが、オーラを相手に直接畳み込まなければならず、はつきり言つて攻撃と大差ないので、急所に念の弱点があればその時点で除念できても、掛けられた本人もあるの世に行くことになり、念が強力ならその分だけ大量のオーラを必要とし、致死の一撃となる。もちろん相手がオーラで防御してると意味がなくなるので、除念できるのは、弱く人体の急所に被らないものだけである。

だが、言わなければ分からぬことであり、嘘は言つてないので、彼女は平然としたまま、

「誰と戦えばいいの、欠員がない場合はヒソカから誰かを倒して入団するつて聞いたけれど。こちらから選んでもいいかい？」

「……、シズクとコルトピ、パクノダの三名は替えが効かないから勘弁してもらいたい、それ以外ならいいぞ」

クロロとしては、彼女の能力は魅力的なので旅団員の誰かに監視をさせるか、外部協力者の形でも取ろうかとも考えたが、彼女の戦闘能力の高さは厄介であり、その目に気づかれずに監視も不可能に近く、裏切りの際や旅団に不利なことをされた場合対処が厄介なことを考え、瞬時にメリットとデメリットの計算を行い、ここで戦わせて旅団

員になれば枷ができるし、負ければ殺せる、もしくは能力を奪うこと  
も可能かも知ないので特別な3人以外と戦うのを許可した。

「では、そこの包帯男と勝負したい。ミイラみたいで不潔そつだから、  
一緒にいたくないから死んで」

「……」

彼女は包帯男ボノレノフに挑む本当の理由を別の理由で隠し、相手  
を挑発した。

彼女とボノレノフはお互い二十メートル離れた位置に相対し、団長  
の合図を待っていた。

戦いの場はさつきと同じ場所であり、足場は瓦礫が所々にあり、よ  
いとは言えず、視界も薄暗く、良好とは言えないが、二者の殺意は高  
まり開戦を今か今かと待っていた。

クロロがコインを弾き、それが床に着くのと同時に、先ず彼女が先  
に仕掛けた。

彼女はヒソカ戦や怪鳥の時に見せた爆発的な速度で肉薄し、地面す  
れすれの前傾姿勢から不可視の一撃を放った。

しかし、ボノレノフも戦う前の彼女の発言やスピードタイプのフェ  
イタンがやられたのを見て近接系のスピードタイプと当たりを付け  
ていたため、開始と同時に後ろに下がりながら全身に巻いた包帯を外  
し自身の姿を見えにくくすると同時に包帯に周を施し、一時的な軽い  
盾とし、自身の穴だらけの体から音を出し、音楽を演奏するという前  
提条件をクリアし、自身の念能力を発動しようとしたが、切り裂かれ  
た包帯の間からオーラを纏つた小さな石が飛び出してきて、予想外の  
攻撃が来たため思わず体勢を崩すことになる悪手を行ってしまった。  
つまり、彼はオーラで身を守り多少のダメージを覚悟で踊り音楽を  
演奏するべきだったのに、胴体に飛んできたそれを軽く体を傾けるこ  
とにより避け、音楽が一瞬とは言え途切れ、同時に体勢が微妙に崩れ  
たため持ち直すのに一秒にも満たない少しの時間が必要となつた。

そして、彼女のサーベルが包帯の壁を容易く破り見えないはずの彼の体に正確に突き刺さった。

一本目がその右足の甲に突き刺さり彼の機動力をそぐのと同時に二本目が即座に包帯の壁から出現し、彼の左足の脇脛を貫通し、三本目のサーベルがさらに彼の右肩を貫通し、そこで彼はようやく体勢を立て直したが、すでにその場から動くことは難しく、四本目のサーベルが彼の右肩に刺さるのを見ることしかできず、最後に包帯を横に切り裂きながら自身の首に迫るサーベルを認めた彼は間に合わないことを今までの戦闘経験から感じつつも全力で硬を首に行い、……その首から大量の血を噴き出しつつも彼女のサーベルを折った。

彼女は折れたサーベルを彼の胴体の穴に投げつける、最後の抵抗の可能性を封じつつ、距離を取り、彼が倒れ、その体からオーラが消えていくのを眺め、消えると同時に、彼に近づきサーベルを抜き、一本一本振り、血を落し鞘にしまつていった。

この戦いを他の団員からの視点で見ると、彼女はサーベルを握り地面すれすれをかけると同時にボノレノフの意識をそちらに集中させている間に左手で瓦礫を拾つたのを体で隠しつつ移動し、

彼が包帯で姿を隠すと同時に切りつけた部分から瓦礫を投げ、ボノレノフの意識をその石に向けさせている間に振りぬいた腰のサーベルを宙に軽く放り投げ、空いた右手で肩のサーベルを抜き、脚の甲に刺し、その時には、石を下から投げ上に上がった手で肩のサーベルを抜いており、二本目を彼の体に刺す時には体を起き上がらせつつあり、残りの二本を彼に突き刺すころには彼女の体勢は完全に整つており、四本目を刺した時には、投げたサーベルを掴み最適な姿勢であり、彼女はサーベルを振りぬき彼に致命傷を与えたのだ。

この戦いはボノレノフが何も出来ず瞬殺されたが、それは仕方のないことである。

なぜならば、彼女は彼の戦闘スタイルを知つており、彼は知らないかった。これだけでも不利だが、さらに彼はその体の都合上どうしても包帯を外すため視界を悪くさせざるを得なく、彼女はその目により完璧に彼を捕らえていた。

そして、決定的なのが、彼女は漫画とアニメにより彼の最初の動きを読めており、その目と合わせたら最初の一瞬とは言え未来予知の真似事さえでき、速さで上回る彼女にとつて勝利が約束された戦いであつた。

そもそも、前提条件が難しいが威力は強力と言うタイプは彼女に勝つのはほぼ不可能である。

先ず、発動される前に追いつめられるということを除いても、彼女の目は大抵の出来事を見抜くため先ず当たらないもしくは、強引にでも破壊され、その隙にやられてしまう。

だから彼女は、

「驚いたわ、まさか私のサーベルが一本、その先つちよだけとはいえ折れるとは。自身の技量のなきに怒りを抱くのは久しぶりよ。あなたの愛と怒り、確かに私に届いたよ」

彼女はその首を切り裂く際、彼がその自身の民族の誇りが通じなかつたことへの怒りとその誇りにより無駄と知りつつも硬を行い彼女のサーベルを折った民族愛を、全てではないが誰よりもその二つの感情に敏感な彼女は感じ取り、彼女は微笑んだ。

「……これによりセリムを幻影旅団の一員とする」

クロロはその彼女の表情にある種の芸術性を感じ見とれていたが、彼女がいつも通りに戻ると、彼も正気に戻り、彼女の幻影旅団入りを宣言したのであつた。

# 彼女は天空闘技場で神になる

「ねえヒソカ」

「何だい？ 君から僕に話しかけるなんて ♦」

「私は私のためにあなたを利用したんだけど」

「そうだね ♦」

セリムは幻影旅団の仲間入りをした後ヒソカと共に近くにホテルを取つて休憩していた。

もちろんヒソカとは別室をとつている。

だが、いま彼女は嫌いなヒソカと何故か同室におり、ヒソカは裸だつた。

「今無性にあなたの利用価値について再度検討しているところなんだけど、どうかしらね」

彼女の視線はヒソカの立派な息子に向かつており、彼女の目は腐りきつた魚の目のように、その手には抜身のサーベルが握られている。

「立派だと僕は思うんだけどね ♦ やっぱ男の価値は大きさだよ ♦」

ヒソカはそんな縮み上がりそうな殺氣の中、平然と弱点を彼女に晒し、濡れた髪をタオルで拭く。

彼女は風呂上りのヒソカの隅々を見ながらもやはり最後にはある一点に視線が集中する。

「ちつ！ 確かにデカいな、けつ」

そして彼女は自分の下半身を何となく見て、魂に染み付く男の記憶思い出す。

「そういう奴が何時の世の中もリア充ぶるんだ！ やっぱ価値なし」

「……君に何があつたかは知らないけど、流石にここは斬らないで欲しいかな ♡ やつてみるとつても気持ちいいから皆虜になるんだけど、やつてみる？ 僕は大歓迎だけど ♦」

ヒソカは体を拭き終わつたのに服を着ずにそのまま彼女に近づいていく。

彼女は堂々と揺れるナニをみてキレる。

「一遍死んでコイやああああああああ！」

この日、ヒソカの貯金は二つそりと減った。

「全く酷いなあ ♣」

「何が」

♠

ヒソカと彼女はホテルから追い出され外をぶらぶらしていた。

「君が壊したんだからお代は君が持ってくれてもよかつたんじやない

♦  
そう、彼は昨日の夜彼女と男のナニを掛けた大切な戦いをしたわけ  
だが、彼と彼女がホテルの一室なんかで戦えば当然何もかもが壊れる  
わけで、彼等がハンターでなければ警察にお世話になつていたところ  
だつた。

ハンターだつたから警察のお世話にはならなかつたが、ホテルの弁  
償はしなければならない。

普通なら喧嘩両成敗と言う訳で折半するのだが、今回は殆ど彼女に  
よつて壊されていた。なので彼女がするべきなのだが、彼女はサッサ  
ととんずらをして逃げてしまつたのだ。

結局その場に残つたヒソカが彼女のホテル代も込みで修繕費を払  
うことになつたのだから彼が文句を言うのも仕方ないどころか聞く  
くらいはしても罰は当たらないと思われるところなのだが、それに対し  
て彼女は舌打ちをする。

「ヤダよ。そもそもあなたが私の部屋で風呂を使わなかつたらよかつ  
たじやない」

「それは君がそもそも僕を部屋に呼んどいて長時間放置したせいだよ

♥

「女にはいろいろ準備が必要なのよ」

「オンナねえ ♦」

「何、文句でも」

ヒソカはハンター試験の出来事を思い出しつつも彼女に意味ありげな視線を送るが帰ってきたのはサーベルのきらめきだつたため、肩を竦めつつも避け、この話題をこれ以上突っ込むのはやめにする。

「いや、何も文句なんてないさ♣」

「じやあいちいち突っ込むんじやない。男のくせにみみっちい奴だ」

「酷い言われようだ♦代金を持った僕に少しくらい感謝してもいいんじゃない♥」

「代金は昨日の戦闘でいいでしょ。私とあれだけ闘いたがっていたんだから満足でしょ。満足したと言いなさい」

彼女から仕掛けてきたのに余りの言い草だったが、ヒソカももともと昨日の件はそこまで気にしておらず、彼女から何かしらの譲歩が引き出せたらラツキー程度で言っていたので、彼女の無茶苦茶な理論にも、確かに昨日の戦いは楽しかったと思いあっさりと引き下がる。

「まあ、確かに満足したからいいけどね♠」

「ふん！それよりもこれからどうする？あなたのせいどころか一帯のホテルに泊まれそうにないんだけど」

彼女は全ての責任をあっさりとヒソカになすりつける。

「うーん。それなら僕の次の目的地に行かないかい♦もともと僕はそこに行く予定だつたのだし、君も一緒にどうだい♣」

「私はもともともう金は殆ど無いから金がかからない、もしくはあんたがおごれるところにしろ」

「それは僕と一緒にいたいということかい♥それなら大歓迎だよ♠今夜も一緒に寝るかい♦」

「いつ私があんたと一緒に寝たというのよ。ふざけたこと抜かすと殺すわよ」

白昼堂々人通りの多い場所でサーベルを抜く彼女、そして人々が騒ぐなか暢気に口笛を吹き降参と両手を上げて意思表明をするヒソカ。

「降参降参、僕なりのジョークさ♣」

「それが遺言でいいなら続けなさい」

「冗談が通じないなあ♥まあ、いいや。行き先は天空闘技場だよ♦」

「なるほどね。確かにあそこならば寝泊まりはタダになるどころか金

が入るね」

彼女は原作を思い出しながら、ひとまず納得してヒソカを軽くひと斬りしてから納刀する。

もちろんヒソカも軽くかわすが、躊躇した彼女のサーベルは道を切り裂き通行人は悲鳴を上げて逃げるため、静かな空間が出来上がる。ヒソカは彼女の殺気のない攻撃を全く気にせず会話を続ける。

「そう言うこと♥まあ、君なら泊めてあげるよ♠なんて言つても僕はそこの二〇〇階クラスだからいい部屋持つてるよ♣」

彼女は無言で硬をした拳を彼の懐目指して叩き込む。

彼女の強烈な突っ込みをヒソカは同じように硬をした手で防ぐとその手をつないだまま空港に向かう。流石ヒソカであると言わざるを考えない。

もちろん彼女は直ぐに手を離そうとしたが、それよりも早くヒソカが手を打つ。

「冗談だよ♦でもちよつと騒ぎ過ぎたからここから離れるには僕のバンジーガムの方が便利だと思うんだけどね♥どう♣」

「ちつちつちつ！」

「ふふ、ありがとうと言つておくよ♠」

ヒソカは睨みつけてくる彼女に微笑みを返すと宙を飛び民家の屋根を走り一直線に空港に向かうのであつた。

「ねえ、ヒソカ」「なんだい♣」  
「やつぱあんたの価値についてもう一度考え方ざるを得ない」「包容力のある男性は女性にとつて魅力的って聞いたけど♦」「あなたの包容力じやあその息子は包み切れていないようだけど」「男の価値は大きさだよ♥」「やつぱ死ね」

飛行船の中でも彼女の手をバンジーガムにより固定しているヒソ

力と彼女は狭い座席の中で周りに被害を出さないように器用に戦い続ける。

### 天空闘技場、通称野蛮人の聖地。

「お嬢ちゃんが相手か。はつこのバジム様も舐められたものだ。怪我したくなきやさしさと帰りな。それともベットの上で俺の相手してくれるなら優しくしてやるぜ」

天空闘技場に一人の大柄の男が対戦相手の綺麗な女性を見て舌なめずりをしていた。

周りの観客もひやひやとした目で試合を見つめる。

ある意味注目を集めていた試合が始まろうとしていたが、そこで注目を浴びる彼女はとすると、

「黙れゴミが！ 私が神だ」

「はつ？ 気のせいかな嬢ちゃん。俺様の耳がちょっと遠くなつてたようだ」

「ゴミだから仕方がない。耳までゴミだとはな。はあ、私のサーベルが無いなんて本当にゴミ掃除が大変だ」

「ここのくそがあああああああああ！」

大柄の男が怒鳴りと同時に試合が始まる。

「シネエエエエ！」

男はその声を聞きながらその拳を女に向けて放つ。誰もが女性の死を連想してしまい、客席から悲鳴が少しばかり上がる。

だが、悲鳴と同時にどよめきが起こり、悲鳴もさらに強くなる。

だが男には周りの音がどんどん遠のいて聞こえた。それは男の視界から女が消え、自分の体が傾いたと感じてからより一層顕著になつた。

男は全く動かない体に違和感を持ちつつも、何とか首を回し、何故だか知らないが後ろを振り返る。

そこには血だらけのオンナがいた。

男は自分の攻撃が避けられたのではなく、それにより吹き飛ばされたのだと思い込んだ。

だからその拳をまた振り上げようとした。

「ああ、また汚れた。これだからゴミ掃除は嫌いなんだよ」

彼の意識はこうして消え去り、天空闘技場は血の雨が降り注ぐ。

後には、バラバラの彼だつたモノが散らばっていた。

彼女は勝手に控室に戻り、次の試合に備える。

しかし、天空闘技場で行われた200階までの彼女の試合はたったの1試合だった。

他にも試合があつたのだが、控室で血まみれにいる女、そして情報が出回ったのか、その女がヒソカのオンナだと知れ渡ると、控室が空になり、彼女の闘う階層にいた対戦相手達は全員この天空闘技場のエントリーを取り消したのだった。

こうして彼女は快適な空間を手に入れる。少しばかりその部屋に血の匂いが染みついたのは仕方ないことだろう。

## 彼女の朝食、チヨーシショツク

彼女は久しぶりに一人で静かに、そして誰にも邪魔されることなく眠れてとても機嫌が良かつた。

だから彼女は朝一番に見た人間がヒソカであつてもただ無言で蹴りを入れる程に上機嫌だつた。

「今日もキレてるね♦」

「そうかしら、私は今日はとてもいい気分だ。今なら変態の生け作りをつくれそうな気がするからね」

彼女はさわやかな笑顔で腰に刺したサーベルを抜く。  
「今日の朝食にそんな予定は無いからね♦それよりも朝食と一緒にどうだい、おごるよ♥」

「…………」

彼女は気分がいいので、このままこいつを切り裂くか、それとも我慢して一緒に行くのかを選択肢に乗せる。  
そして彼女は後者を選ぶ。

「美味しくないと殺しちゃうぞ♥」

彼女は機嫌がいいので少しばかりのリップサービスとして女性らしく彼の誘いに乗ることにした。

それに対して彼も紳士らしく突き出された手の代わりのサーベルの先端を優しくつまむと彼女の方に押し返して、

「味は保証するよ♦」

そのまま流れるようにその手を握るとエスコートする。  
「そう、それは楽しみだ」

彼女も笑顔で彼の手の甲をつまむと彼について行く。  
しつこいようだが、彼女は今日は本当に機嫌が良いのだ。だからウザい彼を切り捨てる事なくエレベーターに向かう。

ここで一つ言いたいことがある。それはヒソカはこの天空闘技場においてかなりの有名人であるということだ。

つまり、彼女のような新人を狩ることをして天空闘技場の200階を闘う者どもにはかなりショッキングな事実であろう。

特に昨日一瞬でこの200階に到達した彼女を捕捉することが出来なかつたギド、サダソ、リールベルトは彼女の部屋の近くで彼女が出来るのを待つていたのだが、あり得ない光景に三人とも押し黙り、彼女がエレベーターで降りていくのをそのまま見逃してしまつ。

「俺、降りる。まだ殺されたくないから、な」

サダソが額に冷や汗を流し、他の二人に彼女を標的にするのを止めることを伝え、そしてもしやるなら俺を巻き込むなど声には出していないが二人にはその思いが嫌という程伝わつた。

なぜならば一人とも同じことを思つていたからだ。

「安心しろサダソ。俺もやらねえさ、なあギド」

「う、うん。そうだね！」

三人は顔を見合わせて誰からとでもなく笑いあう。

しかし、三人は知らない。彼女が既に彼等の存在に気づいていたことも、そしてそれが朝ヒソカが彼女の部屋に顔を出すことにより彼に彼女の意識が向いたこと、最後の彼女の機嫌が良かつたことにより見逃されたことは知らない。

ただ、三人とも何故だか知らないが、ヒソカと彼女が話している姿に恐怖を知らぬ間に覚え、冷や汗をサダソ同様にかけていたなど全く気が付いていなかつた。

いや、彼等はヒソカに恐怖していたために出たものだと勘違いしていただけだともいえる。

実際のところは彼女の殺氣が彼等にも向けられていたのだが、彼女の目の前のヒソカに向けられた濃密な殺気により感覚がマヒして、ただ冷や汗と言う形で彼等の体が答えたのだ。

彼等は幸運だつた。

彼等が対応を間違えていれば今頃廊下に人間大のアートとして壁にシミが出来ていただろう。

三人組は鬼の居ぬ間にこそそと部屋から離れる。その姿は200階クラスまで到達した猛者にはもはや見えなかつた。

ヒソカに女がいるというあり得ない光景に天空闘技場が上に下にと大騒ぎだが、二人は周りなど気にするはずもなく朝飯を食べに天空闘技場の200階クラスの者だけが利用可能なレストランで朝食をとつていた。

ただ、彼女の機嫌は良いのでおごると言いつつも結局ただ飯を食べる場所に連れてきたことに文句など言わない。実際に飯は美味しいのだから。

だから彼女は余り得意ではない放出系の能力を用い、念弾もどきともいうべきオーラの塊を食事中のヒソカの顔面目掛けてぶつけるという可愛らしいいたずらしかしない。

それが二人の距離が近いため当たれば意外と痛い一撃なのだが、それでも彼女にとつてはいたずらの範囲を出ない。

そしてそれはヒソカも同様に彼女の行動を可愛いと思っている。

「ふふ、立っちゃうじゃない♥」

ブチイ

遂に何かがキレる音がすると同時にフォークが飛ぶ。もちろんヒソカは簡単に避ける。

彼が避けたフォークはもちろん何処かに刺さって止まる。問題は何処に刺さるかと言うことだが、もちろん何かに刺さって止まるわけだ。

ここで一つ、この二人が入店してからかなりの数の客が逃げていたのだが、逃げ遅れた客も当然の如く存在する。

つまりこの場合のフォークの新たな置き場所は逃げ遅れた客の後頭部となり、朝一番の死体を作り出す。

彼女と彼にとつて当たり前の何かを即座に壊すbreakfa

stがこうして始まる。

おまけ

「ねえ、ヒソカ」

「何だい♥」

「私は金儲けができるからここに来たんだけど。…なぜかなあ」

彼女はヒソカへとちよつかいを出すのを止めて朝食に集中していつのだが、デザートまでいくと箸を休め、財布の中身を確認している。「私の財布は取つても軽いのだけれど」

「何故だろうねえ◆」

「不思議よね。ここに来たら金儲けができると言つてなかつたけ？」

「さあ♣」

ヒソカはそんなことを言つていないので軽く流す。

だが、彼女の中ではヒソカが天空闘技場に行くことを提案したことになつており、そのメリットも必ず享受されるものだと思つていただけに、素晴らしいルームに朝から上機嫌な気分であつたのだが、気づいてしまうと彼女の機嫌など簡単に変わってしまう。

彼女は昨日最初の試合の後貰つたファイトマネー152ジエニーしかしなく、後はここまで来るのに使つた交通費で財布には札束も他の硬貨すらない。

彼女はその中から1ジエニーを取り出すと、それにしつかりとオーラを注ぎ始める。

その無駄のない洗練されたオーラの操作にヒソカは目を細めてみているが、店のスタッフは皆彼女の殺氣に押されて下がつており、店の中は彼女と彼以外には死体しかない状況になつていて。「ねえ、お金の有意義な使い方つて何か知つてる？」

「ううん何だろうね♦」

彼女はその硬貨を指ではじく体制に持つていくと、その狙いをヒソカに定める。

「どうでさあ、話はハンター試験のサバイバルに戻るんだけどさ、私あの時こう思ったのよね。あいつマジ殺すって」

「？」

「それで、殺すリストに入れた人間は私は絶対逃さない。それは知っているわよね」

こんなところでいきなり眼帯を取り外した彼女に対して、ヒソカは話の流れが見えず、そして彼女がなぜこんなに殺意だつているのか分からぬ。

まあ、ヒソカが彼女が殺気立つてている理由など分かるはずもない。なぜなら彼の前では彼女はいつも殺気立つていてるのだから。だからヒソカは静かに話の続きを待つ。

「それで、試験が終わつたと同時に標的に接触したんだけど、そいつはある男に買収されたつて言つたんだ。私は余りの事実に怒りで目前が真っ赤になつて標的を初めて逃したよ」

ヒソカは遂に彼女の言いたいことが分かつた。それと同時に彼は仕込んでいたモノを確認する。彼は出来る男だ。彼女の殺意と共に反撃の準備をこなすなど朝飯前である。

「ねえ、金の使い方つて、人を殺すために使うのが最もいいと思わない？」

彼女はヒソカに微笑むとヒソカも彼女に微笑み返す。

ただ、どちらも笑顔は暖かくない。裏に逃げたスタッフも倒れ伏すものが続出するほど二人の間にはシャレにならない殺意が空間に満ちている。

「というわけでさ、死ねやああああああ！」

ホールにあるモノがまとめて吹き飛び、ヒソカの能力によりもしくは引き寄せられ、場外乱闘が開幕するのであった。

彼女は最悪の人間と手を組んでいた！

「暇ね」

毎日誰かが血を流すこの天空闘技場で彼女はポツリと呟く。

それに対しても彼女は何を言つていいのか分からず黙つている。

「あまりにも暇だからつい気の迷いであなたを此処に呼んだけどやっぱり暇ね」

彼女は暇だと言いながらもヒソカが静かに本を読む邪魔をちよくちよくとしている。

ヒソカは彼女のちよつかいを軽くあしらいつつもどうしたものかと考える。

「あなたと戦う以外で何か手はない？」

彼女はヒソカにさつきからちよつかいとして鞘で彼を攻撃しているのだが、彼女にとつてこれは戦いではないようだ。

ヒソカもこの程度は彼女と過ごす上では当たり前になり過ぎて、最初の頃こそ楽しかったが、彼も最近はマンネリ化して退屈しているのだ。だから彼女の前でわざとらしく本を読んでいたのだが、それでも少しだけ緊迫感が増すだけだった。

「眞面目に考えてよ。そうじやなければあなたの獲物の、：何だつたけ？スカトロだつたつけそのゴミ先に私が処分してしまうぞ」

「カストロね♥それは流石に困っちゃうな、あれは僕が大切に育てた果実なんだ◆勝手にゴミ箱に捨てないで欲しいかな◆」

ヒソカは漸く本を投げ捨て彼女の鞘を掴むと少しばかり殺氣を滲ませて答える。

「じゃあ、何か考えてえよ。此処に来てから私はたつたの一回しか戦つてないんだよ」

「そう言われてもね♠」

彼女と同様にヒソカも退屈しているのだ。まあ、ヒソカと彼女ではその内容は違う。

ヒソカはそもそもこの天空闘技場では猛者を探すというよりも自分を楽しませてくれるほど強くなる将来性があるモノを探すためだ

けにいるようなものであり、既にそれは見つけてあるのでその彼の楽しみが熟す時を待っている間の暇であり、我慢もまた彼にとつてはより楽しみを増幅させる手段に過ぎない。

だが、彼女の場合は違う。

彼女はこの天空闘技場にはヨークシンでの原作の出来事が起こるまでの時間つぶしのために来ているのであって、そのついでに金稼ぎをしようと考えていた。

しかし来てみれば、此処では一回でしか戦えず、ファイトマネーは結局152ジエニーと言う缶ジュース一本分の値段にしかならず、そして本来の目的である時間つぶしも結局のところヒソカとの関係性や彼女の凶暴性とその実力がばれて誰も相手にしてくれないので。

つまり彼女はこうしてヒソカをわざわざ自分の部屋に招いたのはストレス発散の意味も若干含まれている。（実際の所余りにも暇でもしかしたらと思い招いたという気の迷いが大部分を占める。）

だが、結局のところヒソカは見てているだけで彼女の怒りに油を注ぐ存在なので本当に氣の迷いで呼んだというのが正しいだろう。

ヒソカは彼女の様子が全く変わらないことに、何か手を打たないと本当に楽しみが奪われてしまうと感じたため、前から考えていたことを彼女に話す。

「それなら僕の手伝いをしてくれないかな◆」

「やだ！ それくらいなら今ここであなたを殺す」

「さすがにそこまで嫌われると僕も傷つくなあ♥」

ヒソカはうなだれる様に頭を下げるが、その時に同時に地面に捨てた本を拾い上げる。

そして拾い上げた本を彼女の前に差し出す。

「斬ればいいの？」

「それはちょっとやめて欲しいかな♣ これ10万ジエニーするしね

♠

「そんなゴミが10万！ 世の中ふざけてると思うよ」

「まあ、君にとつてはゴミかもしけないけど金持ちにとつてはステータスになるのさ♥」

ヒソカは彼女の目の前で本を開きつつ、一枚のメモを取り出す。

「これは団長が欲しがつて誘いか。……悪くないかもね♦」

「…………強盗しようかつて誘いか。……悪くないかもね」

彼女は売れれば何ジエニーになるかと指折りで試算する。

その様子にヒソカは慌ててその試算を止めに入る。

「団長が欲しがつて古書だから売らないで欲しいかな♠」

「ああん！私の財布を見ても同じことを言えるのか!?」

まだ蜘蛛に入つたばかりだが彼女の思想は既に黒く染まり切つて  
いると思えてならない。

ともかく彼女は前にヒソカの命を買うのに1ジエニーを使いその  
財布の中身は151ジエニーになつてゐるはずである。

いや、彼女の財布を覗いて151ジエニーあるか確認するのは少し  
ばかり難しかつた。

ヒソカは彼女が取り出し開いた財布を面白そうに覗いてゐるのが  
その答えだろう。

「なかなか中身が…………」

「何」

「いや、それで今どのくらいあるのかな？」

「見て分からぬの、93, 543ジエニーよ」

「…………なるほど♥」

その財布の中身は何故か増えていたのだが、ヒソカは財布の中の硬貨が血まみれなのを見て納得する。

「確かに金の使い方は人を殺すのに使うのがよさそうだ♦」

「でもその本も買えないくらいよ。おかしいよね、可笑しいだろ！笑えよ、笑つたら殺すけど。何なんだこれ、ハンターはもうかるんじやなかつたの？私の財布はハンターになつてから軽くなつてばかりだ。本当にどういうことだ。私は今全く無駄遣いをしていないのに、これだけお金を上手いこと使つてゐるのにハンター試験を受ける前よりも財布の中身が軽いのはなんでだ？この世界は狂つてやがる。私は最強だぞ！ふざけるな！ああふざけるなよ。ふざけてる奴は皆殺しだよ。サーチ＆デストロイだ！クソ、クソクソクソクソクソ

ガアアアアアアア！そんなゴミが私の財布よりも価値があるなんて。私の価値がこれ以下だとでも。あああああああ。ねえヒソカそれやっぱ切り裂かない？そうすれば私は幸せになれる気がするんだけどいいよね。切るよ。邪魔すると斬るよ。…………やっぱ邪魔してもいいや。アンタごとブツタギル！」

ヒソカは彼女の怒りのスイッチがどこで入るか分からぬが、このモードになつてしまつた彼女には既に何度も遭遇しておりそのたびに五体満足で生還している。

彼女はこのモードになるとオーラが跳ね上がるためヒソカは意外とこの時の彼女は好きである。何と言うかもう彼に対する変態と言ふ言葉以外浮かばない。

しかし、ヒソカは今日の昼、強い二人組の子供がこの天空闘技場に現れたのを聞いていたため、此處で楽しむのはもつたいないと考えたのか、まだまだ楽しみのために我慢することにして彼女に本を投げ捨てる。

「フツ」

キレイに斬られる十万ジエニー。

それと同時にそれほどのモノを斬つた爽快感が彼女に走る。

そして彼女はふと気づく。

『あれ？これ、ヒソカから奪つてれば私の財布は今頃二倍になつていた？』

何事もやつた時には満足しても、後になつて冷静になつて見ると人は気づきたくもない事実に気づいてしまうモノである。

「ちよつとヒソカアアツアア！何で止めてくれなかつたの！」

「それはちよつと◆」

「私の十万ジエニーがあああああ！」

彼女は酷く落ち込む。

人は落ち込んでいる時、崖っぷちにいるときは藁にもすがりたくないと言う。つまり、困っている時が人に何かする狙い目だということだ。

もちろんヒソカがそんなことを知らないはずなく。

「これとこれは既に団長は持っているはずだから、二つ合わせて売り  
払えば350万ジエニーになるはずだよ。どう♥」

「本當?」

彼女は上目遣いでヒソカにサーベルを突きつけながら問いかける。  
ヒソカは心の中で『かかった!』と思いながらも顔には毛ほども出  
さずにサーベルの切つ先を少しずらすと囁くように彼女に最後の一  
押しを言う。

「ちなみにここにある店にこれとこれも置いてあつたよ♠」  
「それ何ジエニー?」

「少なくとも今斬ったのよりは高かつた筈だよ♣」

彼女は立ち上がり部屋を一人出て行く。

一人彼女の部屋に残された彼はテレビをつけてこの天空闘技場の  
選手情報や試合内容を確かめ、自分が知りたかった情報を仕入れる。  
「ふふふ、強化系は単純一途♦性格はあれだけど、彼女の基準の中では  
かなり冷静に判断できるし、頭も決して悪くない♠これで彼女は少し  
は落ち着くだろうし、上手くいけば団長に手土産ができて僕の望みに  
一步近づくかもしれない♣やつぱ、変化系の僕と気が合うね♥」

ヒソカは彼女との生活で彼女が何らかの制約で怒りのゲージに振  
れ幅があるのではないかと推測していた。

だからこそ彼は彼女に切り刻まれずにすんでいた。もちろん彼の  
類まれなる戦闘技術が無ければ不可能なことだが。

とにかく、ヒソカと彼女の相性はある意味で最高にいいようだ。周  
囲に与える悪影響を一切無視したら最高の相性であろう。

しかし、彼は彼女を自分の思い通りに動かそうとはしない。

それは彼女を完全に自分の思い通りに動かすのが難しいのもある  
が、彼は自分の楽しみのために自分の命さえベットする男である。つ  
まり、彼は彼女の前に餌こそ投げて進む方向性くらいは決めるがそこ  
からは彼女の自由にさせた方が楽しめると考えているためだ。

狂人と狂人を組み合わせても最悪な結果にしかならない。決して  
マイナスとマイナスの掛け算とはならない。

そして狂人の片方は思考がぶつ飛ぶが何処か冷静な一面を持つ戦

鬪狂であり、もう片方は自分が満足できる戦闘をするために何でもやる思想が狂った知的な狂人。もう最悪である。

「さつてど、彼女の力もある程度推測できだし、後は彼女をどう利用するかだね ♣」

ヒソカはゴンとキルアの情報を見ながら先の楽しみと、目の前に見える楽しみにとてもワクワクしているのであった。

この日一つの古書店が潰れた。

彼女は間違いなく蜘蛛の一員だとヒソカは思う

ゴンはハンター試験後にキルアの兄イルミにより連れ去られたキルアを救いにゾルディック家のあるククルーマウンテンに向かい、修行の果てにクラピカとレオリオと協力して連れ出すことに成功したのだ。

キルアを連れ出してから、クラピカとレオリオは自分の夢もしくは目標のために別行動をとり、キルアはそもそもゴンに惹かれて、彼と友達になりたかったためゴンについて行くことにしたのである。

「この44番のプレートをヒソカに返さないことには先に進めない」「お前も律儀だよな。そうするにしても俺たちはどうするんだ？」  
「ヒソカがどこにいるのかも分からぬし、いろいろなところを回つてみようよ」

キルアはゴンのあまりにも暢気な発言にクラつと自分の体から力が抜け倒れそうになる。

「お前！何でそんなに暢気なんだ！んな暇お前にならんじよ」

キルアは能天気なゴンに詰め寄ると、ヒソカの強さとゴンとの実力差を説明し、遊んでいたら、次にヒソカに会える9月1日のヨークシンでまたぼろ負けして一生プレートを返す機会など来ないことから修行の必要性をゴンに説く。

「そんなん俺とヒソカの間に差があるんだ。でもキルアは凄いね」「まつまあね」

途中ゴンに自分の強さを認められ照れる一幕があつたがキルアはゴンに大切なことを全て説明し、次の目的地をゴンに提案する。

「とにかく、俺たちには修行が必要だつてことだ。それでな、次のヨークシンで行われるオークション会場に潜ることになつたら俺たちは金も必要となるだろ。だから修行と金稼ぎを両立できる場所に向かう必要があるんだよ」

「ほえー。キルアはよく考えているんだね」

「お前が考えなきすぎるだけだ！とにかく天空闘技場に向かうぞ！」  
「天空闘技場？」

「そつ。そこなら対人戦ついでにファイトマネーつって対戦する」と  
に金が貰えるシステムになつてゐるんだよ。これなら一石二鳥だろ」

「すごいやキルア！」

彼等は一人して天空闘技場に向かう。そこにゴンの目的の人物も  
いるのだが、それとは別に第一次ハンター試験会場のヌメーレ湿原で  
キルアに恐怖をもたらした狂人もまたそこに居ることなど知らな  
かつたのは不幸なことだろう。

キルアとゴンが天空闘技場について一日で100階層クラスまで  
到達したころ、彼等の目的の人物と問題の人物は何故か二人してレス  
トランで晩飯を食べていた。

「ヒソカ、これ本当にお金になるの？ だましてないよね」

彼女は今日古書店で強奪してきたたくさんの本を風呂敷に無造作  
に詰めてヒソカの目の前に積む。

ヒソカは風呂敷を開けそれを確かめ始め、それが終了すると、そこ  
から何冊かの本を抜いた後彼女に答える。

「うん、どれも価値のある本だよ♥これは団長が欲しがつてたから抜  
かしてもらうよ♦」

「ちよつと待ちな。何私のモノを勝手に取つてるの殺すよ」

彼女は同じ過ちを犯さないようにサーベルの軌道に気を付けてヒ  
ソカに振るう。

もちろん、本を気づつけないように気遣つた攻撃は何時ものキレが  
足りずヒソカには簡単に避けられてしまう。

「もちろんただで貰おうつてわけじやないよ♠君、これどこで売りさ  
ばく気♣」

「教えなさい」

彼女はヒソカの言いたいことを即座に理解して脅迫する。

もちろんこうなることが分かつていてヒソカは数冊の本を握りそれぞれの価値を眩しつつも盾のように扱う。

「ちつ！」

「理解していただけて何よりだ◆後で連絡するよ◆」

「今教えなさい」

「それは拒否するよ♦そうしたら君、絶対この本も奪おうとするだろ

う♠」

「…………」

「沈黙は肯定とどるよ♦じゃあ、また明日♣」

彼女はイラッとしつつもこの天空闘技場を追い出されるのはまずいと理解しているので、怒りを抑え、彼に向けてナイフとフォークを投げつける。

もちろん、軽くかわされるので彼女の怒りはちつとも収まらない。なので彼女もさっさと食事を済ませてもう一度誰か命知らずの馬鹿が自分に挑んできていなか確認するために窓口に向かうのであつた。

そして彼女はそこで忘れていた事実を一つ思い出すのである。

「猶予期間？もう30日間戦つていないからあと60日未満？」

彼女のサーベルは血を欲していた。そしてまずいことを呟く。

「そろそろ彼等が来る時期だつたつけ？確かめとこ」

くしくもこの日とある二人組がこの天空闘技場でその非凡な力を見せつけていた。

天空闘技場に着いたキルアとゴンは順調に戦いあつという間に200階クラスに到達して、200階から今までの戦闘システムと異なるため新たに選手登録が必要となることを聞いて受付期間が短いことから二人は直ぐに受付に行こうとする。

「キルア、どうしたの？」

「どうもこうもねえよ。俺が此処に初めて挑戦した時は二年もかかったんだぜ。それなのにたつた一日でクリアされるのはなあ」

ゴンはその時はキルア八歳だつたじやんと思いながらも声には出さず苦笑でそれにこたえる。

「そつそれよりもキルア。次はどんなんだろうね？」

「んー。次つてもそんなにすごくないんじやねえのか。ここまで楽勝だつたし」

この天空闘技場は200階以上からある意味本番なのだが、キルアは子供の頃は200階到達で挑戦を止めているし、ゴンはそもそもクジラ島から出たことが無い世間知らずなためそんなことを知る由もない。

なので、このままでは「200階の洗礼」と呼ばれる念能力者と非念能力者の違いを見せつけられ大変な事態になる可能性があつたが、彼等みたいな極上の果実が生ると分かるモノをあの男が見逃すはずもなく、二人の足は受付の廊下を目の前にして止まることになる。

二人は突如襲い掛かる重圧に体が前へ進むことを拒みその場に釘付けになる。

「キッキルア、これは俺たちに向けられた殺氣だよ」

「くそ、そこに居る奴！ 出てこい」

二人が注目する通路の奥から一人の女性スタッフが現れる。

このスタッフはどう見てもこのような殺気を出す人間に見えなかつた。実際キルアには全くと言つていいくほど彼女から実力者としての片鱗は窺えなかつた。

そしてこのスタッフはこの殺気に全く気付いていないようで。二人に対して200階クラスの説明をし始める。

もちろんこんな異様な空間の中でそんな説明を冷静に聞けるはず

もなく、二人はスタッフがどう動いても良い様に身構える。

そんな彼らが注目しているはずなのにその女性スタッフの後ろから突如男が現れた。

「えつ！」

二人はその人物がヒソカであることに驚いたが、それ以上にさつきまで女性スタッフに注目していたのに彼が何時現れたかが分からなかつたことにもつと驚いていた。

そんな様子の二人にヒソカはこの200階クラスの先達として忠告をする。

「君たちにはまだ早い♣」

キルアがヒソカに文句を言えど彼はその場に座り彼等を通さない。

そして、スタッフはこの異様な光景に気づいていないのか、二人に登録は今日中であること、キルアは既に一度登録を取り消されているため、今回登録をしないと永久に200階クラスでの登録を受け付けないことを告げた。

ゴンはともかく、キルアは焦り、どうにかして通ろうとするが、後ろから現れた男により止められる。

「二人とも止めておきなさい。君たちは余りにも念に無防備すぎる」

「ウイニングさん！」

シャツを何故かズボンからいつもみ出しているだらしない男の正体をゴンとキルアは知っていた。

二人はこの天空闘技場でこの男の弟子であるズシと呼ばれる少年と友達になつていた。

そして、キルアとズシが一度戦つてた時に明らかに常人ではあり得ない気迫と耐久力を持つていたため、キルアがそれについて言及し、燃について教えてもらつたことがあつたのだ。

そして今、ヒソカに対する念を受け二人は一度退散し、ウイニングに念について指示してもらうことにし、この場から去る。

「ふふ、どうなるかな♦」

ヒソカはキルアとゴンを連れて行つた男が中々の念使いであることを見抜いていた。

それは二人が良い師に巡り合えたことを意味するため、ヒソカはより強くなつて此処に二人が現れることを半ば確信し、それまでの間をトランプタワーを作りながら楽しみに待つ。

そんなヒソカは一段また一段と丁寧にトランプタワーを作り上げていく。

そして、それが完成し、後は一気に壊すだけの段階になる。

ヒソカはゆっくりと人差し指をその頂点に導く。彼は作ることも楽しみではあるのだが、壊すことの方がより一層快感を感じるたちなので、この瞬間を大切に味わう。

しかし、彼は即座に降ろすはずだつた指を下げる。

「楽しみを奪わないで欲しいかな♠」

彼のトランプタワーは無惨にも切り崩されていた。だが、不思議なことにそのトランプはどれも斬れていない。

「私、壊すのだけ好きなんだ。特にあんたが作るモノを壊すのは」

ヒソカは処置なしとばかりに肩を竦めトランプタワーを作るのを諦め、彼女との会話を代わりに楽しもうとする。

「どうしてここにいるんだい♣」

「知つてた？」

「？」

相変わらず時たま会話がつながらない彼女に彼は疑問符を頭に浮かべつつ先を促す。

「ここって猶予期間があるらしいじゃない」

ヒソカは彼女がこの200階に来てから誰とも戦わずにこの一か

月間過ごしていたのを思い出す。

「まだ60日近くあるはずだよ♦」

「でも、私は受付にあなた以外いつでもどうぞって出しているのに全く誰も相手にしてくれない」

ヒソカは彼女がこの天空闘技場に来てから起こしてきた数々の問題を思い返しながらも、眞面目な顔を装つて頷いておく。

「そうだね♥」

「おかしいよね?ここには170人もの参加者がいて週に何回かは戦闘があるのに私のだけは誰も参加して無い」

彼女のサーベルの切つ先が地面に埋まり始める。

ヒソカは爆発が近いことを感じつつも、ちょうど暇をしていたことだし、それを止めずに見守る。

「ねえ、ヒソカ、これって誰かの陰謀? 戦わずして私が敗北つてないと思わない。そんなのおかしいと思わない。絶対におかしいよね。おかしくないと行かないよねえ。戦わずして負けるなんて馬鹿げたことなんてあるはずないよね? と言うか誰でもいいからいい加減戦いに来いよ殺してやるからよ!……ブツブツ……」

ヒソカは彼女が此処に暇つぶしに来たことは知っているし、何より金を稼ぎたいならもう一度一階から丁寧に上がつてくれればいいだけだと思っている。

彼は彼女に幻影旅団の次の大仕事は9月1日だと告げつてあるので、今から数えて約6か月此処に滞在すれば十分なのだ。

つまり、彼女はこのまま何もせずに、あと二ヶ月かけて一回去り、またゆっくりと200階まで上がりまた3か月待てばいいだけだが、ヒソカはそれを決して口に出さない。

言わぬ方が面白いことになるのは間違いないからだ。

しかし、ヒソカは彼女の様子が変なのに気がつく。

ヒソカが思考している間に彼女はいつの間にか沈黙していたのだ。

「?…どうしたんだい♦」

「…………

彼女は受付方面に去つて行つてしまつた。

肩透かしを食らったヒソカは少しばかりガツカリしながらも、ゴンとキルアと言う新しい楽しみがすぐそこまで来てるのを思い出し、すぐを持ち直す。

そして彼女がいなくなつたのでまた一からトランプタワーを作りなおしては崩す作業に入り時間を潰すのである。

ヒソカが彼女がおかしかつた理由に気づくのは翌日の200階クラスの対戦表を見てからのことである。

「別に、ゴミの代わりに私が、ゴン君と戦つてもいいよね。大丈夫、私我慢できる。殺さなければ大丈夫。最悪腕の一本二本は問題ない。フフツ、フフフフフフ」

彼女は気配を殺して、楽しそうに二人組を待つ新人狩りの三人組の後ろで更に楽しそうに待つてゐるのである。

## 彼女がヤリニクル

ヒソカにより200階クラスに到達できても、登録が出来なかつた二人はウイングの元で念について学び、そしてその身に念によるオーラを纏うことに成功する。

そしてゴンとキルアはヒソカのオーラの中を進みきり受付に到達した。

キルアが受付した後、キルアはゴンが何やらワクワクしているのを感じたので、もしかしてと思い、ゴンに試合をすぐにするつもりなのかと問いかける。

「うん。ウイングさんはしちゃダメだつて言つてたけど。今の新しい自分の力を知りたいんだ」

「はあ、何言つても辞めるつもりもないんだろう」

「うん」

キルアはゴンが一度言い出したら変わらないことをハンター試験中に実感していただけにため息をつく。

「！おい、ゴン」

「何？キルア」

「あれ」

キルアはゴンが試合の申し込み用紙を書いている最中に気配を感じ、その方向を向くと、変な三人組が立っているのに気づきゴンに知らせる。

三人組は彼等をじつと見るだけで何もしてこない。そんな三人組にキルアは問いかける。

「何の用？」

「いや何、俺たちも試合の申し込みがしたくてな」

「ふーん。おいゴン！こいつらお前と戦いたいってさ」

キルアは彼等が新人狩りであることを見抜き、ゴンにどうするか一応聞く。

ゴンはそんなキルアに頷いてみせると、申し込み用紙にサラサラと記入し、それを提出すると同時にその内容を大声で読み上げる。

「いつでもどうぞ！」

三人組は笑いながら、誰が行くか目線で決めあい、足がない、ギドと呼ばれる男がその中から出てくる。

「俺が行こう。ふつふふ……」

彼は獲物がかかつたことに笑いをこらえきれなかつたのだが、その笑いは途中でひきつる。

「殺すよ？」

その場に濃密な殺氣が満ちる。

突如ギドの後ろから女性が現れる。

サダソとリールベルトはその見たことのある女性とその殺気に慄き、サダソは尻餅をつき、リールベルトはその改造車椅子から転げ落ちる。

真後ろに立たれて、その肩を壊さんばかりに握られているギドは止まらぬ汗によりビシヨビシヨになり、意識が半ば飛びかけている。

キルアとゴンはヒソカの時と同様に全く感じ取れなかつた気配が突如現れ、自分たちに向けられていなが感じ取れる殺氣に身を硬くする

。

「やあ、ゴン君。ハンター試験ぶりだね？」

「ゴンはいきなり現れた女性がハンター試験で会つっていた彼女であること気に気づき、挨拶する。

「あつ！セリムさんだ。こんばんは」

キルアはゴンの振る舞いに感心しながらも同時に彼を心の中で罵倒する。

「ふふ、こんばんはゴン君。それで、私と戦わない？どうやら念を習得したみたいだけど、それじゃあ大怪我しちゃうし、実力が知りたいなら相手になるよ？私もここに来て誰も相手にしてくれなくて困つていたし。いい？」

「うん」

「ちよつ！」

ゴンの即答にキルアが慌てるがそれよりも前に彼女は事前に用意

して いた受付用紙を 提出 し て し ま う。

「そ れ じ ゃ あ ま た 明 日」

「うん、セリムさんもまた明日」

キルアは急いでゴンを連れてこの場をさる。それを彼女はゆっくりと見送りながら、クルリと振り返ると未だ固まり続ける三人組に向けて再度殺氣を放ちつつ、ゆっくりと彼等の間をすり抜け、すり抜けぎわにボソリと呟く。

「文句、無いよね？あるなら言つてもいいよ」

彼女はサーベルの柄に手を置きながら彼らに視線を向ける。

新人狩りなど意味のなく、情けないことをする三人組に文句を言う気力などあるはずもなく、ただ無言で首を振る。

「そう」

彼女は通路の奥に消えて行く。

「今日は帰つて寝よう」

三人組はトボトボとあてがわれた自分の部屋に帰るのであつた。

次の日、ヒソカはハンター試験で感じたゴンの性格、そして自分は興味はないがこの天空闘技場の新人狩りと言われる雑魚どものことを思い浮かべて、朝食を優雅に食べつつ、今日の試合内容を確かめる。そしてゴンの試合を見つけ、笑みを深くして、その対戦相手を見て、彼は朝飯のトースターを手から落としてしまう。

彼の視線の先のテレビにはゴン v s セリムと映っていた。

ヒソカは慌てて彼女の部屋に向かう。

しかし、慌てすぎていたヒソカは気づかない。

朝風呂で彼は今腰にタオルしか巻いていないことに……。

「ふつふ、ふーん」

バン！

「どう言うことかな♠？」

ブチン

「最悪の朝だー!!? ほんと、もう死ねよヒソ、力ああああああああああ！」

「ゴン！無理だと思つたら即降参しろよ！マジで殺されるかもしけないからな！分かつてんのかゴン！」

「キルアは心配性だなあ」

「だいあおああ！アイツはヒソカ並みに危ないやつなんだつて！」

「大丈夫だよ」

「どこからくるんだよその自信はよつ！」

「殺したら流石の僕も怒るよ??」

「別に念さえあれば治せるんだから腕の一本二本」

「ダメ♠？」

リングの上にはゴンとセリムが対峙している。

主人公は原作において殺す気で書かれてはいるが、ここでゴンの未来が終わらないかハラハラする。しかし既に両者は対峙し、今まさに火蓋が切つて落とされようとしていた。

## ゴンはやはり主人公である

「さあー今日は新人対決です。まずは破竹の勢いで勝ち上がってきたゴン選手が早くも登場でーす。対するは彼が此処にくる約一か月前に天空闘技場についてたつたの一試合戦つただけで他の選手を恐怖のどん底に落とし一瞬でこの200階クラスに勝ち上がってきたセリム選手！彼女にはなんとヒソカ選手の恋人何ではないかとうわさが流れもはや腫物物件です！ひやう！すみません少しばかり冷房が強かつたようで変な声を出してしまいました。さあ皆さん試合は間もなく開始されます！ちなみに戦いの解説はこのコツコがお送りします」

コツコは突然感じた寒氣に他のスタッフにエアコンの設定をいじるよう指示を出す。

指示を出し終えた彼女の視線は二人の選手に向かっていた。

場内アナウンスを聞きながらゴンは対戦相手のセリムを見ると、目を瞑りウイングさんに昨日教えてもらつた纏があくまで防御の技であること、そして相手が格上だと大げがをしてしまうことを思い出しつつも、彼はどうしても試してみたかった。

ゴンは場内アナウンスと共に今まで弱弱しかつたオーラが膨れ上がりつた彼女を見て、自分よりも彼女が圧倒的格上だとみて分かるし、昨日の夜さんざんキルアに彼女の強さと危険さを聞かされた。

だが、それでも彼は自分の新しい力でどれだけ彼女に食い下がれるかそして、ハンター試験でヒソカを追いつめていた彼女と闘うことによりどれだけヒソカと今の自分の差が開いているのか感じたかった。「よろしくお願ひします！」

ゴンはズシの真似をしてオッスと胸元まで持つて居つていた両腕を左右に開きお辞儀をする。

彼の目には強い意志の力が宿っている。

「…………」

しかし、彼女はそんなゴンを全く見ておらず、彼女の視線はふざけたことを抜かした奴を視界に収めることに全神経を注いでいた。彼女の目は腐っていた。

「あの女か。殺す、……それは駄目？ 何で？ あれはスタッフだから。そう、私が負ける。それは許されない。でも殺す。私が我慢する何て許されない。ヒソカと恋人？ 誰が？ 誰と？ 恋人。いや、ただの噂。でも流した奴がいる。だれ？ そいつは殺しても大丈夫。誰を拷問すれば分かる？ 誰を脅せばいい？ それともヒソカをいつそ殺す？ 嫌だめだ。あいつは利用価値がある。でももう負の価値の方が大きい？ あああああああ！ どうしよう。どうしよう。殺したい。殺したい。殺したいでもダメ。腕の一本は良い？ それとも二本まで？ ヒソカ良いつていてた。それなら殺さない？ 誰の腕を斬るの？ 誰だつたつけ？ ヒソカ。それいい。でも違う。彼女？ でもダメ？ ああああああ。誰だ？」

彼女の呟きは歓声と共に消え誰の耳にも届かない。

そしてリングに両者が揃つたのを確認した審判の腕が降ろされる。

「それでは、始め！」

今日もつとも歓声が膨れ上がった。

ウイングはモニターに映し出されるゴンを見て困ったように頭を搔いていたが対戦相手を見た瞬間その表情を一変させる。

「ズシ！ 急ぎますよ」

「えっ！ 師範代どうしたんすか。チケットがないと見れませんよ！」

「問題ありません。気づかれなければいいのです」

「師範代！ どうしたんすかああ」

ウイングは対戦相手が一度ヒソカと喧嘩しているのを見たことがあつただけに慌てていた。

「とにかく急ぎますよ」

『まずい。彼女はそこらの選手たちとは格が違う。彼女は今のゴン君の纏ではあつてないようなものだ。急がなければ殺されてしまう！』  
彼は弟子を置き去りにして走つて行つてしまふ。ただ、彼が走つて向かつた方角は間違つてはいなのがあつてもいなかつた。

「師範代……そつちは遠回りですよ……」

残されたズシは残念そうにポツリと呟くのである。

「んんー？これはどうしたことでしょか両者全く動きがありませ  
ん。今だ開始位置からどちらも動いていません」

解説の言葉通り、試合が始まつたのにゴンもセリムも微動だにしな  
い。

その為観客からはブーイングの嵐が飛び交う。

しかし、ゴンは彼女から発せられるプレッシャーに押され、そして  
彼女の攻撃を警戒して動けなかつた。

しかし、彼女には全く動きが無いどころか隙だらけにしか見えない  
ゴンは最初は戻なのと思っていたのだが、だんだん彼女の発するオーラになれると、彼女が此方に全く意識を向けていないのだと気づいてしまう。

彼女の態度はゴンなど相手にならないのだと言つてゐる様に感じ  
られてしまいゴンは拳を強く握ると、恐怖を押し殺し、彼女に急接近  
する。

「おおーと。ここで最初に動いてるのはゴン選手！物凄い突進  
だああ。これはくらつてしまふとクリティカルヒットは確実どこ

ろかダウンまで狙えてしまうのではないでしようか！対するセリム選手は、…つて反応なし！このままだとくらつてしまふぞおおお。何がしたいんでしょうか彼女は！つてああ！ゴン選手の拳がセリム選手の顔につきささつたああ！」

ゴンは自分の攻撃が入ったことに驚いていたがそれ以上に自分が殴つたのが生身の人間だと信じられなかつた。

「つううううう。これ、ネテロさんの腹に頭突きをした時に感じた硬さだ」

ゴンの言葉に、彼に殴られたことにより上半身を軽くのけ反らしていた彼女は反応する。

「ね、てろ？」

彼女から殺気が溢れ出す。

「あのエロ爺」

ゴンはここで彼女に攻撃のチャンスを与えてはならないと感じ、彼女の体目掛けてもうラツシユを繰り出す。

「うおおおおおおおおお！」

「おおーと。連打連打！もうラツシユだああああああああ！これはセリム選手なすすべがないかあああ。凄まじい勢いです」

攻撃しているのはゴン、その勢いはすさまじく、彼女は徐々にリングの隅に追いやられていく。

追いつめているのはゴン。しかし、攻撃している本人は全く逆の思いを持つていた。

『駄目だ。こんなんじや駄目だ。彼女に全然ダメージが入つてる気がしない』

ゴンは一旦彼女から離れる。

それは彼女に自分の最大の攻撃を与えるためでもあつたのだが、このゴンの一手は最悪手だつた。何故ならば彼女に攻撃のチャンスを与えることになつたからだ。

普段の野生児ゴンならばこの様なミスを犯さない。しかしここは普段のゴンでいられる場所ではない。ゴンは無意識のうちに彼女からの恐怖を押さえきれずに下がるという行為を自分の攻撃のためだ

と勘違いして行ってしまったのだ。

よつて、ゴンは次のアクションに移るときにその過ちに気づいてしまう。

「クリティカルヒットアーノドダウン！・ゴン選手プラス3ポイント！」

ポイントがゴンに付くが、ゴンにはそれはが自分の勝利に近づいた証でも、彼女との差が意外と近かつたことの証明にもなりはしない。

ゴンは慌てて助走をつけた拳を彼女に叩き込もうとする。しかし、なかなか彼の体は前には進んでくれない。それどころか、ゴンにはアナウンスも審判の声も上手く聞き取れなかつた。それは彼の体同様に周りの音が余りにもゆっくりに聞こえ始めていたからだ。

「殺す！」

それでもゴンの耳には彼女の声が何故か鮮明に聞こえるのであつた。

そして彼の体の時間が元に戻つてゴンが最初に聞いた音は悲鳴であり、それ以降の彼の意識はなくなる。

彼女は自分の体が攻撃されているのを理解していたが、彼女は怒りによつてそれが誰だか半ば忘れていた。

殺したい奴の顔がヒソカ、アナウンスをしている女コッコ、そしてうわさを流した誰かと思い浮かぶがそれでも彼女は殺意を押さえようとする。

「ネテロ……」

そこに彼女をイラつかせた名前がさらに追加され遂に彼女の怒りは爆発する。

彼女は決して屈辱を忘れない。出来ることなら洗濯機と乾燥機ごと、ネテロをゴミにしたかつたのである。

だから彼女はヒソカとの約束を忘れる。と言うか、ヒソカとの約束など彼女の中にはあつてないようなものだつたが、僅かばかりの理性を繋ぎ留めておくには役に立つていたのだが、彼女にはもう怒りしかない。

彼女は向かってくる拳に憎いモノの顔を浮かべながらも、まずその攻撃を片手で受け止める。

そこからはもはや常人には追いついていくことは不可能であつた。彼女の動きが物凄く速いという訳だは無い。だが、誰も彼女の動きについて行けない。

彼女は一步踏み出すと先ずゴンの頸を軽く蹴り上げ、即座にその足を振り下ろしては彼の肩の骨を碎く。

そしてその振り上げた足が完全におりる前のとても不安定な一本足で立っている体勢から彼女は肩の四本あるうちの一一本のサーベルを軽く抜くとそのまま振りぬきその体を立てに裂こうとする。

しかしここで少しばかりの奇跡が起きる。不安定の体制のせいか室内で拭くはずのない風に彼女の体が少し煽られ彼女の剣の軌道が少しだけズれたこと。それとゴンの野生の感と、野生動物みたいなそのハンターとしての資質と才能がたっぷりな体が無意識のうちに体を捻つた結果、彼は致命傷を避けることに成功する。

それでも、ゴンの命は風前の灯だ。彼女は殺す相手は確実に殺す主義である為、即座に返す刀でゴンの首を狙うがそのサーベルは途中で軌道を変えて観客席のとある一席に飛び込む。

ここまで彼女の攻撃は一瞬のうちにに行われ、観客がゴンが攻撃したと思い見ていたリング上の次の光景は大量の血を流し倒れ込むゴンの姿であった。

会場からは悲鳴があがる。それと同時に去る彼女と、慌てて駆け寄り担架を呼ぶ審判をみて解説役のコツコは意識をとり戻し、慌てて解説に戻る。

「なつ、何が起きたのでしょうか！ゴン選手が攻撃をしたと思つたら、そ

のゴン選手がいつの間にか血まみれでダウンしています。彼は生きているのでしょうか！」

彼女は後ろで喚く観客、そしてスタッフを尻目にただ前を見つめ去つて行く。

「やっぱ。彼死んだらどうしよう。これ死んでたらもう、ヒソカも含めて原作主要キャラ皆殺ししないとイケナクナルカナ？」

彼女は早足にこの場を去る。

やつてしまつたという後悔とその自分のミスを見る気が起きず足早に去つているのだが、それ以外にももう一つ。彼女が何とかゴンに止めを刺さなくて済んだようにした人物の今後の行動が読めたからでもあつた。

「危なかつた◆彼女は後でお仕置きだね♥」

ヒソカは観客席で彼女が自分の殺気に反応して飛ばしてきたサーベルを近くにいた観客で防いだため、返り血を浴びていた。しかし、彼はゴンが生きていることに安堵し、サーベルを死体から抜き、これを返す時どうしようかと不気味な笑みを浮かべつつ彼女の部屋に向かうのであつた。

## 彼女は吠える

「ゴン！おい、ゴン」

キルアは病院に運ばれたゴンの病室に来ていた。

病室に駆け込んだキルアは、包帯でぐるぐる巻きとなつたゴンに駆け寄り声をかける。

「もう食べられないよ、むにや、むにや」

下手な寝言が帰ってきたためキルアは思わず、彼の頭にチヨツップを落とします。

「イッタ！つてキルア？あれ？ここはどこ？」

ゴンの最後の記憶は彼女に殴りかかろうとしたところで止まつている。なので彼は混乱しつつも周りを見てここが試合会場ではないのを悟るとキルアに詰め寄る。

「キルア！試合はどうなつたの？、イテエ！」

怪我をしていることに気づいてなかつたためかゴンは悶絶する。その様子に呆れながらもキルアはゴンも薄々分かつてゐるであろう結果を伝える。

「負けだよ。それもボロ負け」

「そつか。強いなあ！」

ゴンは負けると分かつてゐたが、それでもいざここまで圧倒的に負けてしまうときすがに凹んでいる。

ゴンの見たことのない弱気にキルアはどう声をかけていいか分からなかつた。

「うん。今度は勝つよ！次は何とかいけるよ」

キルアはすぐにいつものゴンに戻りホツとしたが、同時にふつふつと湧いてくる怒りをゴンにぶつけなければ気が済まなくなつっていた。「次だああ。何能天気なことを言つてやがる！お前理解しているんの？あの女にお前殺されかけたんだぞ！次なんてねえよ！」

「でつでもキルア。こうして生きてるわけだし、それに怪我はそんなに見た目ほど酷そういうじゃないよ」

ゴンは病衣を脱ぎ切られた上半身を見せる。包帯が巻かれて痛々

しいが、逆に言うと包帯しか巻かれていなかつた。

「動くとちよつと痛みが走るけど、これならすぐに治りそうだよ」

ゴンはキルアにそう言うが、この病室に入る前に医師にゴンの容体を聞いたキルアは自分の手を制御できなかつた。

むんず

キルアの手はゴンの傷跡を優しく掴んでいた。ただ、キルアは殺人一家の天才児。傷口を開くことなくゴンに激痛をプレゼントする。

声にならない声をあげ、ゴンが折れていない方の肩の腕をバタバタ動かしているのを見てキルアは心底呆れる。

「全治1ヶ月だよ、このバカが！お前が助かつたのは本当に偶然だよ！偶然。分かつてんのか」

「そこまで言わなくとも」

「いーや、理解していない様だからもう一度言うけどあんなの偶然以外の何物でもないね。奇跡と言つてもいいほどだぜ」

キルアはなおも言い訳をしようとするゴンの傷を再度優しく撫でてあげる。

「あの試合、俺は爺や親父にしごかれたからかろうじて見えたけど、本当にお前が死んだと俺は思つたんだぜ」

「キルアはあるの時何があつたか分かるの！」

「ん、ああ、それは客席から見逃さない様に集中してみてたからって、もしかしてお前あの女の攻撃を全く見えていなかつたのか」

「うん。何にも。気づいたら病院だもん」

キルアは今度は両手で傷口をいたわる様にゴンを撫でてあげる。傍目には親友を気遣う様にも見えなくはないが、その親友は悶絶している。

「よくそれでもう一度戦つたらなんて言えるよな。はあ、で、何が起きたかだつけ。お前の攻撃は簡単に片手で受け止めた後、その包帯が巻かれている顎にまず蹴りを一発。そのまま返す足がお前の肩を碎いたと思つたら、体が倒れる前にサーベルでその傷跡の様にバツサリさ。まじ化けもんだなあの女」

「ふーん」

「ついでにその時あの女の体が少し揺れなかつたらお前あの世に行つてたな。もしくはお前が無意識に体を捻らなかつたらな。本当お前つて野生児だよな」

「えへへへへ」

「とにかく、死にかけたつてことをよく理解しろよ。たく、あれだけ試合は棄権しろつて言つたのに」

「でも無事だつたからいいじゃん」

「これのどこが無事だつて？お前もあの時声をかけてきた三人組の様に体のどこかを持つていかれたかもしれないんどぞ」

「うん。でもそれでも、あれほど強い人と戦える機会なんてそういう気がするんだ」

「はあ」

キルアがゴンのまつたく反省していない姿にため息をついているとウイングが入つてきて、ゴンを再度叱るのであつた。

「なんで私がこんなことしなければいけないのよ」

ゴンがウイングから叱られている頃、彼女はとくに、強盗に勤しんでいた。

「くそ！別に死んでないじやん！それに全治1ヶ月なら原作よりも早く治るというのに、私は全然悪くないじやん！むしろ主人公のためにいい壁として出てあげただけじやん！ちつ！うるさい」

彼女はゴンを殺しかけたということをすでに忘れていた。そんな彼女はとある屋敷の扉を蹴破り、大胆に屋敷に侵入をしていた。

そんな彼女に対しても奇声をあげて銃をぶつ放す男ども、彼女はその銃弾を切り裂き一步一歩前へ進み、ついでとばかりに死体を増やしていく。

彼女は銃を向けられ撃たれているというのに全く焦らずただ目的地の部屋まで歩く。その際何かを斬り殺しているが彼女は気にならない。彼女がこの場で気にするのはヒソカに盗む様に言われた目的物のみだ。

彼女は自分の歩く道を血で染め上げながらも目的地に着くと、その部屋にあつた金庫を切り裂き開ける。

分厚い鉄の金庫の扉が簡単に倒れる。

彼女はようやく仕事が終わると金庫の中に入つて愕然とする。彼女がどれだけ金庫の中身を見てショックを受けていたかというと、その手に持つサーベルを取り落としてしまうほどである。

「こつ、これは」

そこに彼女の携帯が物騒な着メロを流し始める。

彼女はその携帯を握りつぶさない様に取り出し誰からか分かつているが確認し、少しだけ画面にヒビを入れてしまう。

彼女は無言で通話ボタンを押す。

「…………」

「やあ、僕だよ♥」

「…………」

「反応が悪いなあ◆?まあいつか、それよりも大切なことを伝え忘れていたよ♣?」

携帯が嫌な音を立て始める。

「昨日、どうやら引越しがあつたみたいでね目的地の住所はここじゃないんだ♠?」

ヒソカが新しい場所を告げている間、携帯の画面のヒビの数はどんどん増えて行く。

「というわけでごめんね♥」

めきや

暗い室内に火花が飛び散り、携帯だったガラクタが床に落ちる。

「ヒ、ソ、カああああああああああああああ！絶対殺す！」

彼女の咆哮が響き渡るのであつた。

彼女は漢字に弱いのかもしれない

「おかしい」

彼女は一人部屋で呟く。

「財布が何時まで経つても膨らまない」

彼女は財布を逆さにして、中にある金をテーブルにぶちまける。そこには少々の小銭が出てくるだけである。そして彼女は今度は通帳を覗くが、そこには彼女が以前強盗で稼いだ金額の1／10程度しかない。

彼女はまた口の中でおかしいと呟くが、彼女は気づかない。

彼女がヒソカをこの部屋に連れ込むたびに、もしくはヒソカが侵入するたびにこの部屋がこわれていくのだが、それが直ぐに修理されていることに。

今日も彼女はイラつとして朝今自分が座るイスを壊していたのが、それが直っていることに気が付きもしない。

「またヒソカか！」

彼女は即座に八つ当たり先を見つけると、ヒソカの部屋に突撃に行く。どうやら、先日の嘘の情報が相当頭に来ていたようだ。ハツキリ言つていぢやもんである。

しかし、彼女の今回の八つ当たりは意外との的を射ていた。

彼女の通帳の金を部屋の修理に当てる契約を彼女が強盗に精を出している間にハンコもろもろを利用してヒソカが勝手に結んでいたのだ。普通によろしくないことなのだが、天空闘技場側も困っていたため両者の利害が一致した結果、彼女の金は毎日コツコツと減つているのである。

彼女は原因は自分にあるのだが、それに気づきもしない。本来なら領収書などが彼女の元に届くはずなのだが、毎朝彼女で遊ぶために来るヒソカがそれらの一切を回収してしまうため彼女は気づけない。彼女は今日も天空闘技場でお金を使うのである。

「おいゴン！これ見ろよ」

キルアは完治したゴンにあるチケットを見せる。

「どうしたのキルア？そのチケットがどうかしたの？」

「よく見てみろよ」

そのチケットにはヒソカの名前があった。

「あ！ヒソカそれいつなの」

「落ち着けよゴン。今日のチケットだよ」

ゴンはキルアに詰め寄りそのチケットを持つ手を握る。そして、対戦相手の名前を見て首をかしげる。

「カストロ？キルア知ってる」

「この天空闘技場で唯一ヒソカからダウンを奪った相手だよ。だから今回このチケットはかなり人気があつたんだぜ」

「ふうん」

「ゴン行こうぜ！」

「ちよつと待つてキルア。まだ約束の一ヶ月が過ぎてないよ」

「あつ！ そudadつたな。お前の回復が余りにも早すぎるからもう一ヶ月たつたような気がしていたぜ」

ゴンは怪我をした口にウイングから誓いの糸を指に結ばれており、ケガが治る一ヶ月の間念の修業を禁じられていた。

ただ、キルアが言う通り、ゴンは怪我 자체は2週間程度でほぼ完治まで持つたいたため、キルアと普通に外に出たりと完治に一ヶ月かかる怪我人らしからぬ行動をしていたため、怪我が治るまでの期間＝約束の期間と思いキルアはゴンにこのチケットを持ってきたのだ。「ま、試合を見るだけならいいだろうよ。それにもう数日で約束の一ヶ月が過ぎるし問題ないだろう」

キルアは見に行こうぜと続けたかったが、その前にいきなり後ろから感じる嫌な気配にその場から離れる。

「あつ！セリムさん」

キルアの後ろには彼女がいた。

「てつ！ テメエ何の用だ！」

「そんなに警戒しなくても」

彼女の言葉はいささか無理がある。キルアは警戒を解かないが、ゴンは気にせずに彼女に近づく。

「何か用かな？」

彼女は朝の運動を終え、何時ものようにヒソカと朝食を食べた後、ヒソカからカストロ戦のチケットを貰い、どうしようかと悩みつゝも、今日は何処に強盗に入ろうかと天空闘技場を出ようとして、主人公たちを見つけた。

『あれは、ゴンとキルアか。指に糸を付けているし原作通りに進んだと  
いうことか』

彼女は遠目に彼等を視界に入れつつ、どうしようかと考える。

『ここで彼等に対してもいい印象を持たせるメリットと強盗するメリットどちらがいいだろうか』

物騒なことを天秤の片方に乗せながら彼女は思考し、遂に考えがまとまつたのか、二人に近づく。

彼女は気づかない。既に天秤の片方に乗せてあるモノがちゃんとおもりりがあるかどうかに。

そして声を掛け、見事にキルアに警戒されるのだが、ゴンの怖いもの知らずの態度に助けられ、本題にスムーズに入るのである。

「君たちが何か約束事を破ろうとしていたみたいだからそれを止めようと思つただけだよ」

「何でいきなりあつたお前にそんなことを言われないといけないんだよ」

キルアが最もなことを言うが、彼女はそんなキルアを残念な子を見

る目をする。

「なつ何だよその目は」

「はあ。君たちは念について何も知らないんだね。哀れだ」

「いきなり何なんだよお前はよ！」

キルアが恐怖を忘れて彼女にかみつく。もちろんそんなキルアをなだめるのはゴンの役目なのだが、彼女はとてうと優越感に浸つていた。

「何も知らない馬鹿に教えてあげよう」

彼女の頭には好印象を与える当為目的は薄れているようだ。

「念能力とはゴン君が私との試合で見せたように常人では考えられない防御力等の力を与えてくれる。つまり念により生まれるオーラとは一種のエネルギーだ。つまり、このエネルギーの使い道によつては様々なことが出来る」

ここまで彼女が上から目線で言うとキルアはハツとしてゴンの指を見る。

「これにも念が込められているのか」

「そう言うことだから約束事を破るとそれは千切れるということ」

彼女は能天気に念について彼等に教えていたが、彼女は肝心なことに気づいていない。

彼女が注意したものはある条件で千切れてしまつことに。

「あの～セリムさん」

「ん？どうしたのかな。説明はまだと……」

三人の視線が一か所に集まる。

「切れちゃつた」

「…………」

ゴンの指の糸は綺麗にブツンと切れて解けてしまつっていたのだ。

「あはははは

「アハハハハじやねえだろゴン！おいクソ女どうしてくれんだよこれつ」

「黙れクソガキ！私は悪くない！」

彼女はゴン達と友好関係を気づきに来たのかもしれない。

しかし、彼女はキルアの自分に対する悪口に即座に反応すると手が出てしまい、キルアを壁に叩きつけてしまう。

友好とは、有効打のことであろうか。

「キツキルア、大丈夫？」

ゴンは慌ててキルアの元に駆け付ける。

「大丈夫じゃねえよ。叩かれた頬が腫れただろうが」

彼女が本気じやなかつたと言え、頬が腫れるだけで済むキルアは流石である。

そして吹き飛ばされたキルアは当然の文句を言う。

「いきなり何すんだよ。お前のせいでのんの糸が切れたんだぞ。それなのに逆切れかよ」

「何言つてんの。約束が何だつか知らないけど、約束の内容を知らない私を責められても困るわよ。後不可抗力」

「キルア、僕たちの不注意を彼女のせいにするのは良くないよ」

ゴンは冷静に判断するが、全て彼女の責任で、キルアの指摘は実は正しい。

何故ならば、彼女はキルアたちの事情を一から十まで全て知つていたのだから。本当に何をしに来たのであろうか。

ウイングが来るまでキルアと彼女との口論は止まることを知らない。ただ、残念で理不尽なことにキルアが一方的に彼女にボコられていただけであり、好印象を与えたかは甚だ疑問であろう。

ちなみに、この事態はウイングが最初から見ていたため、ゴンが念能力を教われなくなると言つた最悪の事態は免れたのである。

## 彼女は駄々をこねる

暗い室内でヒソカは彼女に両腕を抱かれていた。

室内にはベットの近くに置いてあるインテリアとしての照明が弱弱しい光を放つのみであり、その光はヒソカの表情を映し出すことは叶わず、同時に彼女がどんな表情をしているのかさえ分からない。

静かな室内に響くのは、両者の荒い息遣いだけである。

「もう、放してくれないかな◆君の気持は嬉しいけど、他の子が僕を待つていてるから君だけの相手はしてられないんだ◆」

ヒソカは己の両腕を抱く彼女を自分の胸に誘うようにして力強く引っ張る。

「いやーこの手は離さないし、私は騙されない！今、やらないといけないの！」

それに対しても彼女は引っ張るヒソカの力を弾くと、喉を枯らすように叫ぶ。

それに対してヒソカは彼女のかたくなな様子に困り果てる。

彼は彼女を説得するために彼女と離れてしまった距離を縮めるために、腰を掛けていたベットから立ち上がり彼女との距離を詰めようとする。

その際彼の汗を吸つたタオルがはらりと掛けられていた首から落ちる。

「本当に困つたね◆僕は君のことをこんなに好きなのに♠」

騙すはずがないじゃないかと言葉を連ねようとしたヒソカだったが、それよりも早く心を閉ざしてしまった彼女が、さつきの彼女の熱い思いが籠つた叫びとは違う熱量も感じられない冷たい声をだし、ヒソカの耳朶を打つため彼の思いは彼女に伝わらないし、伝えられないと。

「私は、嫌いだ」

「…………」

ヒソカは彼女に掛ける次の言葉が見つからないし、彼女もこれ以上

嫌いなヒソカに口を開く気になれない。

両者の間に沈黙がおりる。

しかし、両者の目はしっかりと相手を捕らえている。どちらも相手の一拳手一投足を見逃さない様にその顔を見る。

彼女が好きだと言うヒソカ、そしてヒソカが嫌いだと言う彼女。二人の思いは相反するモノでありながら、二人の相性はばつちりであるのか、二人の間の熱は冷め止まらず、沈黙が支配するこの場ではあるが、その空気は冷たさなどない。

ヒソカを睨む彼女の目にはヒソカに対する怒りが、ヒソカはその怒りを許容する愛が二人の視線を絡み合わせ、そして静かにこの場のボルテージを上げていく。

ヒソカが沈黙を破り、口を開く。

「君が僕を嫌いなのは知っているよ♦」

ヒソカはベットにつく少量の血の跡を一瞬チラツと見ると、視線をすぐに彼女に戻すと、その足を前へと進める。

「そして僕の思いを君が受け取れないのも知っている♦だけど、今は放してくれないかな♠」

彼女はヒソカの動きに合わせてジリッと一步後ずさる。

そして、遂に下がり切れず、壁に背を付けた彼女を見て、ヒソカは彼女に血を幾度と吸つたであろう鞘から抜き放たれたものをちらつかせながら、追いつめた彼女に更に滲みよる。

「君の大切なモノを奪つたのは謝るよ♥ 責任も必ず取るよ♦だから今は……」

「返せ！」

彼女の拳がヒソカがぶら下げるものに向けられる。

「返せと言われて返せるはずもないし、諦めて欲しい♦ちゃんと後で君の言う責任を取つてあげるから、だから君も離して欲しいかな♦」  
はあ。

室内が急に明るくなり、二人の視線は室内を明るくしたため息を吐いた人物に向けられる。

そんな二人の様子をずっと見ていたマチが呆れたように二人に声

を掛ける。

「何してんだいヒソカ？サッサとして欲しいのだけど。それとセリム、あんたも私の仕事の邪魔をしないでくれない。アンタら二人と違つて私は忙しいのだけれど」

マチはぐるりと室内を見渡し、床にヒソカの血で汚れたタオル、そして彼女と相対する両腕の無いヒソカ、それに対してもヒソカの千切れた両腕を抱きかかえ、ヒソカに奪われたサーベルに片手を伸ばす彼女を確認すると、またため息を1つ吐く。

「さつさと治療をしたいのだけど」

「ヒソカが今ここで私に嘘を吐いた責任としてヤラせてくれるなら腕を返してあげる。その後治療をすれば良い」

「私に死体を治療する趣味は無いし、それだと代金をぼれないんだけど」

「大丈夫。ヒソカはこれでも幻影旅団の一昧、その首売るところに売れば十分だと考えられるから問題ない」

「それもそうね。こいつは死んだ方が価値が上がるかも知れないわね」

「おいおい、勝手に人を殺さないでくれ♥セリムもいい加減返してくれないかな、このサーベル返してあげるから◆」

「人のモノを奪つておいて何様のつもりだ！」

ヒソカの両腕を強奪しその腕にもつ彼女が果たしてこのセリフを言つていいモノだろうか？

同様のことを思つているのかマチは、  
「セリム、こいつに何言つても無駄だよ。いい加減諦めてヒソカにその腕返しな」

二人のやり取りにこれ以上突つ込むのを止め、さつさと自分の依頼された仕事をこなして帰ろうとする。

もちろん、納得のいかない彼女であつたが、冷静な時ならいざ知らず、ヒートアップして冷静じやない彼女は結局ヒソカの体に5、6発拳をお見舞いしただけで、後はヒソカの達者な弁術により有耶無耶にされたのである。

ヒソカの体はカストロ戦で追つたダメージよりも深刻なダメージを彼女から与えられたが、それでも彼女は割に合わないと咳き、ヒソカの治療の邪魔をするように、部屋の照明を壊し、ベットにダイブし、顔を枕にうずめず、ヒソカの使用していた枕をその辺に捨て、そのままのキレイなシーツに顔をうずめ足をじたばたさせ、すねていた。

女の子がベットで足をじたばたさせ、顔をうずめてじたばたさせる。これだけ聞くと可愛らしい映像を思い浮かべる人が多いだろうが、彼女の場合可愛らしくなかつた。

その足をじたばたせる行為はキレイなシーツをボロボロの布切れに返させ、その下のベットは物凄い勢いでホコリと部品をあたりに散らばせており、どつからどう見ても可愛らしくない。彼女にとつてこれはヒソカに対する嫌がらせ以外の何者でもないのだ。

そんな、げんなりする光景をヒソカと一緒に見ているマチは、治療をする前にあれをどうにかしなくてもいいのかとヒソカに目で訴えかけるも、当のヒソカは金銭的被害は全て彼女が負う為、その様子を楽しそうに眺めるだけであり、マチの視線の意味など分からず、首を傾げるのである。

そんなヒソカを見たマチは彼等について全てを諦めて治療をしてさつさとこの場から出ることにし、ヒソカの治療を始めるのであつた。

「あつそうだ。帰る前に、ヨークシンについてだけど、暇な団員改め、全員参加するようだつてさ」

さつさと帰ろうとするマチは帰り際に大切な連絡事項を二人に伝える。

それを聞きヒソカは、マチの治療に感嘆して、満足げだった表情を一変させ、自分が知りたい情報を訪ねる。

「それ、団長もくるのかな・」

「全員よ」

ヒソカは目を細める。しかし、ヒソカの鋭い表情は直ぐに隠される。

「ふーん♦それは絶対に参加しないといけないね♦それよりも今日は一緒にディナーでも…」

マチはヒソカのお誘いにこの部屋を出るという形で断る。マチに振られたヒソカは彼女を次に誘おうとする。

「僕と一緒に…」

「二番目か！ふざけるな！」

ヒソカの一番になりたいわけではない。でも、ヒソカ如きにマチの代わりみたいに扱われるのは我慢ならなかつた。

彼女は今日もヒソカの命を買うために散在をする。（主に修理代）ヒソカの命はかなり高額のようだ。なので今日も彼女は夜の街を駆け、強盗をするのである。

## 彼女は飽き性

天空闘技場は熱氣に包まれていた。

新人のゴンが破れてからある程度時間が経っていたが、この二百階クラスの戦闘は頻繁に行われるモノではなく、人々に強烈なインパクトを残す。

故に、常人には理解できない、念能力を用いたギドの舞踏ゴマは観客を驚かせるには十分で、ある種のエンターテインメント性を持ち合わせており、そんな危険な念能力を使用した駒と踊った様に見えるゴンは観客の記憶にも新しく。そんなゴンが二回目の相手として選んだのがまたギドというリベンジ戦は、盛り上がるモノがある。

観客はここで死ななかつた新人が何かしらの力に目覚めることを長く見ている者ほど感じているため、ゴンがどのようにしてギドに抵抗するのかが、とても楽しみであり、それと同時に、一試合目みたいなコマと踊っている様な素晴らしい何かが見れないかと、隣のモノと試合展開を予想する。

そんな煩い会話の中、異様な一角があつた。もちろん、セリムヒソカである。

「ゴ機嫌ね」

煩わしそうに彼女はヒソカに問いかける。問いかけられて方は上機嫌で応える。

「ああ、果実が漸く生つて来たんだ◆これで嬉しくならない方がおかしいよ♥」

ゴンの纏うオーラを見てゾクゾクするヒソカの一部を嫌そうに見た彼女はイカれていると、自分のことを棚に上げてぼやく。

「君も彼には一目置いていたと思つていたんだけど? この試合興味がないのかい♣」

ヒソカはこの試合のチケットを持って彼女を招待したのだが、まさかついてくるとは思つても在らず、ついてきたからにはゴンに興味を持っているからだと考えていた。

「別に、私にとつて彼だろうが、貴方だろうが、それは全て些事に過ぎ

ない。私にとつて全ては等しく殺せる相手であり、私を否定する者であり、私が肯定させてあげるモノに過ぎない」

彼女は会場のどんどん上昇するボルテージに比例して、テンションを下げていく。

「なら何のためにこんなところに♦」

彼女はその問いに何故か苛立たしそうに貧乏ゆすりをする。

「さつさと蜘蛛の為すことをしてみたいだけだ。お前の目的がどの程度かも知りたかったしな」

「君がそんなに仕事熱心だつたなんて、僕のためにありがとう♥」

ヒソカのわざとらしい感謝について腰のサーベルを抜いてしまう彼女だが、何度も似たようなやり取りをしていれば、呼吸をするようにヒソカも簡単に避けてしまう。

「ちつ。帰る」

一切ヒソカを斬ることが無かつたサーベルをしげしげと見た後、彼女は席を立ち出口に向かう。

「試合は見ないのかい♦楽しそうなのに♣」

「理解できないね。結果の分かりきつた試合を観戦するイカレ野郎の楽しみなんてね」

彼女はギドに憐みの視線を向けた後、ヒソカに一切見ずに出で行つてしまつた。

「残念♦熟そうとする果実を眺めるのも楽しいと思うんだけどね♥」

ヒソカは、以前のゴンと比べ、その急成長ぶりに興奮しつつ、残念そうに隣の空席を眺めるのである。

試合は、ゴンの圧勝であつた。

一方、試合会場から出た彼女はと言うと。

「よかつああああ。彼が無事にウイングに指示できていてよかつた」

彼女は以前、原作では切れることのなかつた指の糸が切れてしまつ

たことにまずさを感じながらも、ヒソカとのど付き合いですっかりと忘れており、ヒソカに今日のチケットを貰つて、久しぶりにそのことを思い出し、もし仮にゴンが念能力を使えないままギドとの戦闘になつてしまつたらと、試合会場に現れたのだが、どうやら、原作に大きな影響がなく、彼女はホツとしていた。

ホツとした彼女は、壁にサーベルを深々と突き立てていることには気が付いていない。

彼女はいつの間にか突き刺していたサーベルを抜くと、上機嫌で走り去る。

しかし、上機嫌の彼女は気が付いていなかつた。ゴンの戦闘能力が、彼女が思つていたよりも強くなつていたなど、しつかりと原作に影響を与えていたことなど、彼女はまだ知らない。